

ベート・ローガ? の
眷族の物語

カラス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

英雄に憧れた一人の少年が時に泣き、笑い、苦しみながらも仲間たちと共に成長し歩んでいく世界が正史と言うならば、これはそこから少し外れた世界の物語。

正史からはずれた世界において、性格と言動、考え方が少し変わった一人の狼人の織り成す「喰い違う物語／ウルフ・ヒストリア」である。

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうかの二次創作です。

ベート・ローガの性格が改変されています。

それが大丈夫な方はよろしければご一読下さい。

誤字脱字があれば教えて下さると嬉しいですよ。

目次

いつものこと／日常風景

始まりの一	1
始まりの一?	25
争乱の二	40
争乱の二?	56
終戦の三	76
終戦の三?	94
帰還の四	108
帰還の四?	125
遊宴の五	147

いつものこと／日常風景

始まりの一

山羊のようにねじれ曲がった二本の大角。首から上には膨れ上がった馬面とでも言うべき醜悪な顔面。真っ赤な眼球が蠢き獲物の姿を睥睨する。怪物というに相応しい巨軀を動かし、夥しい数の黒い塊が鈍器を持つ太い腕を頭上高く振りかぶった。

「盾エ、構ええツ——!!」

大号令、戦場に声が響き渡る。その声に応えるように何十枚もの大盾が怪物達の進撃を食い止める。怪物の突撃の威力を物語るように、盾を構えた者達の踵が地に埋まった。

「前衛、密集陣形を崩すな！ 後衛組は攻撃を続行！」

凶悪猛猛な怪物——モンスターに対するは、複数の種族からなるヒューマンと亜人族デミヒューマンの一团だった。ドワーフ、エルフ、アマゾネス、小人族バルックム、獣人、各々が役割を果たすべく動き回る。一本の草木もない荒れ果てた大地。岩や砂、全てが赤茶色に染まった茫漠たる大空間。何十もの階層を積重ねた地底深くで、人とモンスターが戦闘を繰り広げる。

「ティオナ、ティオネ！ 左翼支援急げッ！」

小人族の首領の指示が矢継ぎ早に飛ぶ。目まぐるしく移ろう戦況を、彼の指揮によって団員達は把握する。

「あーんっ、もう体がいくつあっても足りないっ！」

「ごちやごちや言つてないで働きなさい！」

命を受けたアマゾネスの姉妹が疾走し、モンスターを斬り伏せる。

屠れども屠れども途切れることなく現れるモンスターの大量は、事実悪夢のような光景だった。

一匹一匹が大の大人を易々と越す巨体から繰り出される棍棒型の鈍器による攻撃に、盾を構える者達の顔を苦悶に変える。

その攻勢に、防衛線はじりじりと後退させられ、半円を描く陣形がその規模を小さくしていく。

巫人達の一団は押されつつあった。

「リヴェリアッ、まだあー!？」

アマゾネスの少女の声が向かう先で、絶えず紡がれる美しい声が響く。

「——間もなく、焰は放たれる！」

翡翠色の長髪に白を基調とした魔術装束。浅く水平に構えられるのは白銀の杖。細

く尖った耳を生やした、絶世の美貌を持つエルフ。この戦場で誰よりも美しく在る彼女は、その玲瓏な声で呪文を紡ぐ。

詠唱とともに足元に展開された魔法円マジックサークルが翡翠色に輝く。

その柳眉を逆立て、彼女は呪文を紡ぐ唇をそのままに、前方の一点を力強く見据えていた。

流れる詠唱を聞く者達はまだかまだかと奥歯を噛み締め攻撃に耐える。

『——オオオオオオオオオオオオウツ!!』

群れの中で一際大きいモンスター、フォモールの二体が仲間すらも蹴散らしてそれぞれ突撃を仕掛けて来る。轟音と共に人が吹き飛び、その突撃によって陣形の一部がこじ開けられた。

小人族の団長、詠唱を続けるエルフ、前線で指揮を執っていた筋骨隆々のドワーフがマズイと、同時に直感する。巫人達の一団の中で立場、実力共に頂点に立つ三者が対応を一瞬で考える。

詠唱するエルフの女性は対応することは出来ない。

詠唱を中断することは即ち決定打を放棄することに他ならないからだ。高火力の魔法による殲滅を主眼に置いた戦術を取っている現状、それだけはしてはならない。

また前線で指揮を執っているドワーフも動けない。

自らも陣形の中に組み込んで今、そこから離脱すれば一部どころか、前線そのものが崩壊する恐れがある。

小人族の団長は一団が誇る最高戦力の一人である金髪の少女に指示を出し、カバーに走らせる。

だが、前線の両端から崩された為に、少女一人では援護仕切れない。詠唱をする女性とは別のエルフの少女の救援は成功したが、まだ一手足りない。

自分が動くか、そう決断し走りだそうと足に力を込めたその時、視界の端に落下してくる影を捉えた。目をやり、そして小人族の団長は足に溜めた力を抜き、笑みを浮かべる。

「まったく、相変わらず君は無茶をする」

ポツリとこぼしたその言葉は、誰に聞こえるでもなく戦場に溶けていった。

「オオオオオオオオオオオウウツ!!」

前衛を抜き、後衛にまでその手を伸ばしたフォモールは眼前の敵を殺戮せしめんと、その身に力を込めた。亜人達の悲鳴が上がる、アマゾネス姉妹が反転し討伐に向かうが間に合わない。けれど、振り上げられた棍棒型の鈍器が振り下ろされることはなかった。

肉が潰れる生々しい音と、硬い地面を砕く轟音が鳴る。一瞬、亜人達とモンスターは

その動きを止め、音の発生源を注視した。詠唱を続けるエルフの女性の声のみが空間に響いていた。

砂塵が舞うクレーターの中心で、紅い滲みとなったフォモールの上にゆつくりと立ち上がる者がいる。サラサラと流れる灰髪に、ピクリと動く二つの獣耳、黒のインナーの上には白色のファーの付いたグレーのジャケットと足下で光る白銀のブーツ、力強い印象を感じさせる尻尾を一振りし、ゆつくりと周りを見渡す。

普段あまり感情を表に出すことのないその顔が、周りの傷ついた団員達仲間を見て、眉をひそめる。自らが作り出したクレーターに巻き込まれ転けていた団員仲間に手を貸し立たせた後、小人族の団長へと鋭い視線を向けた。

「——どういふ状況だ」

ダンジョンの階層を一つ突き抜けて仲間の窮地を救った後とは思えないその態度に、団長は苦笑浮かべた。高所からの落下によるダメージも大きいだろうに、この青年は何よりも先に仲間達の状況を聞いてきた。相変わらずだと思ふと同時に、危ういとも感じる。けれどその行動によって助けられた身としては咎めることもしにくい。だからこそ、自分のやることは決まっている。

「敵の数が多くてね、前線を維持することが難しいんだ。リヴェリアの魔法がもうすぐ完成するから、盛大な遅刻をしてきた君には大いに働いて貰うよ？」

いいかい？ と笑みを浮かべながら問う。その言葉に対して青年はフツと軽く息を吐いた。言われるまでもないと言わんばかりの態度だ。

一つ上の階層で団員に余計な消耗を強いることのないように、一人でモンスターを集団を引き付けたことを遅刻という言葉で嗜めつつ青年に遊撃の指示を出す。

確かにその行動によって自分達はスムーズにこの場に来ることが出来た。この青年なら問題ないと信頼もしている。けれど万が一を考えるのが当然のダンジョンで単独で集団から離れるなど自殺行為であるし、咎めなければならぬ行動だが、この青年は何度言っても聞きやしない。普段なまじ聞き分けが良く素直なだけにたちが悪い。後の説教は確実だが、今はこの場を切り抜けるのが先だ。

「頼んだよ、ベート」

領きを一つ。本陣から一直線に走り出し、白い獣が直ぐさま前線にたどり着く。

ウェアウルフ

狼人だからというだけでは言い表せない俊足。単純な速度なら自分達の中ロキ・ファミリアでも随一

のその速度をもつて、仲間の危機に駆けつける。陣形が崩れる間際に走り寄り、味方を援護する。助けられた仲間が礼を言う前に次の場所へ。

全体の士気が上がる。ベート・ローガの参戦。それだけで仲間の体に力が巡り、声を上げて疲労していた動きにキレが戻る。僕の立つ瀬がないなあ、と冗談めかして呟きながら、団長は全体を見渡す。

ロキ・ファミリアが誇るLv. 5の第一級冒険者が一人。狼人のベート・ローガ。彼が来たことで動きが変わる。例え窮地に陥つても彼が援護に来てくれる。そんな信頼がファミリア全体にあるのだ。それほどまでに、彼に助けられたことのある団員は多い。けれど彼らはベート・ローガに、いやロキ・ファミリアの中心である第一級冒険者の者達にだけ、負担を押し付けることを良しとしない。迷宮都市オラリアでトップに立つファミリアの一員としての誇りが、絶るだけという軟弱な考えを否定する。

皆を見守る団長、聡明なハイエルフ、豪快なドワーフ、天真爛漫なアマゾネスの妹、直向きなアマゾネスの姉、孤高の剣姫、誇り高き狼人。彼らは助けってくれる、引つ張ってくれる。彼らだけならもつと遠くに、もつと高くに行けるはずなのに。それを自分達が邪魔をする。仲間という鎖で縛りつける、そんな自分達が許せない。無力で未熟な自分に憎悪する。

だからこそ——声を上げろ、齒を食いしばれ。自分達は大丈夫だと、言葉ではなく行動で示せ。何よりも雄弁な行動によって見せつける。

共に進み共に笑い共に居る為に。

吼えろ、俺達／私達は戦えると!!

『おおおおおおおおおおおッ!!』

巫人達の一団による砲声が、ビリビリと空気を震わせる。押されていた前線を押し戻

す。敵は強大？ だからなんだ。自分達は道化師の御旗の元に集まった精兵だ。負けるものか、この程度の修羅場、踏破してこそロキ・ファミリアだろう！

「ベート来るのおつそーいッ!! どこで道草を食つてたのー」

「……一個上の階層でモンスターと追いかけてっこだ」

「団長の指示も聞かずに勝手に動くからそうなるのよ。今までサボつてた分も働きなさいよ」

「デイルナ団長と同じ事言うんだな」

「ホントっ!? やっぱり私と団長は心が繋がってるのね!!」

仲間がさらに勢いづく中、アマゾネスの姉妹がベートに近寄りそれぞれ声をかける。言葉は違うがそれぞれ心配していたのだ。それがあの登場の仕方だ、文句の一つも言いたくなる。ベートは言葉少なに返答し、愛しの団長と同じ事を考えていたということにテンションを上げた姉がモンスターを切り刻む。

妹が振り上げた専用武装、大双刃^{ウルフガ}が頭からモンスターを両断する。

狼人がモンスター達の死体を飛び越え、ナイフを飛ばす。無造作に投げられたように見えるナイフは、それぞれが意思を持つかのようにモンスターの防御をかいくぐり手や眼に突き刺さり仲間の攻勢の起点となる。

彼は武器として双剣やナイフも使うが、本来の武器はその手であり強靱な脚である。

そんなことを露とも感じさせないナイフの扱いに、自分も投げナイフを使うアマゾネスの姉は舌を巻く。

飛び越えた先、落下するベートを狙いすましたかのように、フォモールが棍棒を横薙ぎに振るう。そのままなら棍棒型の鈍器に打ち据えられるだろう。が、彼はナイフを投げた勢いそのまま体を捻り、棍棒型の鈍器に着地して、振り切られる棍棒の威力と己の脚力をもつて戦場を高速で横断した。飛んでいった先でモンスターの魔石を砕き灰にする。

「おおー、ベートが凄いいことした！ 私もやってみよっ！ かな？」

「やめときなさい。あんな曲芸染みたことを実戦でツ！ 実用レベルでやるのは普通無理よー！」

アマゾネス姉妹がそれぞれフォモールを倒しながら、目の前で起こったことを言及する。モンスターの攻撃の向き、タイミング、威力を見極め、体勢を崩さず狙った場所に行く。もはや曲芸と言うよりも絶技と言えるような行動だ。

周りの団員は驚いている者も少なくないが、付き合いの長い二人からすれば今さらで、ベートだからという言葉で済ませられるようなことだった。

「そろそろ下がれ、団長にどやされる」

飛んでいった先、前線で盾を構える者達の側に降りたベートの言葉に、一気呵成とば

かりに攻めていた者達の頭に冷静さが戻る。自分達の役目は陣形の維持であつて、戦線を押し上げることではない。分かつていても逸つていた気持ちが静まり、攻撃に向いていた力が今度は強固な守りとなる。

「ふむ、ようやくと戻つたか」

前線指揮を執つていたドワーフが溜め息混じりに、けれどどこか満足そうに言う。油断なく自分が抜けた穴を埋める仲間を見やりながら、ベートに近寄る。

「そんな顔をするなベート。これも経験だ」

隣に並んだベートが向けてくる、どこか非難するような視線に笑いながら背を叩いた。気付いていたなら止めろと言外に告げるベートに、自分達幹部に頼るだけでは成長しないのだと諭す。ベートがフイツと視線を逸らす、理解と納得は別なのだと言ふの反論。

クツクツクとそんな年相応とも言えるベートの態度に笑いを漏らす。バシバシと乱暴に背中を叩き、珍しい反応を見せた後輩に目をやる。

左側の額から顎にかけて彫られた青い稲妻のような刺青、刺青によつて荒々しい印象を与えながらも美形と言える顔立ちに今は疲労の色が見える。

前の階層で離脱してからこれまで、モンスターと戦い今もこの戦場に来てから休みなく動いていたのだから、それも当然だ。ここを抜ければ大規模な休息レストだ、その時にでも労つてやろう。

「合図だ」

背にある手をどけながら、ベートが本陣を見て言う。

「む、やつとか。アイズ!! 戻れえッ!」

ドワーフが前線を超えてモンスター相手に暴れ回っていた、金髪の少女に大声で呼びかける。金の髪を靡かせながら、アイズと呼ばれた少女がモンスターの群れの中から跳びあがり、陣の中ほどに舞い降りる。その瞬間、地面に描かれた翡翠色の魔法円が強く強く輝いた。

「レア・ラーヴァアテイン」

大炎。

炎柱がモンスター達を焼き尽くす。眼前全ての敵を包み込む炎は冒険者達の顔を緋色に照らす。炎が消えた後に、モンスターの集団は一匹残らず消え去っていた。

一拍置き、大歓声が上がった。

仲間と肩を叩き合い、武器を掲げて喜びを分かち合う。

ここにダンジョン深層、49階層の戦闘が終結した。



ダンジョンの50階層、ここはモンスタ―が生まれない数少ない安全階層だ。セーフティポイント

49層の激戦を潜り抜け興奮冷めやらぬ中、ロキ・ファミリアの面々は大規模な休息レストを取るための準備をしていた。その中を縫うように歩く少女が居た。

金糸のように美しい長髪、神々にも引けを取らない整った相貌の少女。アイズ・ヴァレンシユタイン、第一級冒険者であり剣姫の二つ名を持つロキ・ファミリアの幹部。

彼女は今、アマゾネス姉妹の姉、テイオネ・ヒリュテに言われロキ・ファミリアの首脳陣が待つ幕屋へと足を進めている。先ほどの戦闘で前線の指示を無視して敵陣に攻め込んだことだろうと、言われることの予想は付いていた。付いていたからこそ足取りは少し重い。

指示を無視するということは全体の歯車を狂わし、ともすれば全滅の可能性が浮上する、組織の一員としてやってはいけないことだ。もちろん現場の判断で行動することは大切なことであり、これから向かう先にいる彼らはそれが有効な判断ならば怒りはしない。けれど、先ほどの戦闘での行動が本当に必要だったのか、と言われれば素直に首を縦に振ることは出来ない。前線が立て直した時点で自分は戻り、遊撃として待機すべきだった。その程度のことには彼女も理解している。

そして、理解しているにもかかわらず追撃をしたことが問題なのだと分かっている。ファミリアの皆は大切だ、組織の一員としての行動の重要さも分かっている。

けど、それでも私は――。

グルグルと思考が煮詰まりながらも歩くのを止めなかつたため、気付けば目的地に辿り着いていた。考えるのは後にしよう。そう決めて、アイズは本営の中に入っていた。

「失礼し――ます?」

挨拶が何だか疑問系になってしまった。なぜなら、入った先には既に怒先られている人客が居たからだ。スラリと長い足を折りたたみ、背筋を伸ばして床に座らされている――確か正座と呼ばれる姿勢――人物。灰色の髪の毛から出る獣耳と腰にある尻尾が元気なく垂れている。その様子に触つてみたいという願望が覗くが、奥に居る三人の視線に気が付き、すぐに前を向いた。

「やあ、来たかい、アイズ。色々と言いたいことはあるけど、取りあえず」

正座、と笑顔で言われた言葉にアイズは素直に従った。

「うん、それでよし。それでアイズ、何を言われるか分かっているね?」

満足そうに頷いた団長、フィン、デイルムナは端的に呼び出した理由を告げる。

フィンの言葉にアイズは頷いた。それを見てフィンは冷静な口調で聞いたです。

「なら話は早い。どうして前線維持の命令に背いたんだい？」

柔い黄金色の髪に湖面のような碧眼。誰よりも幼い外見でありながら深い理知を感じさせる彼こそが、ダンジョン攻略にお全ての指令と判断を下す、全団員の首領だ。

「アイズ、君は強い。だからこそ組織の幹部でもある。内容の是非を問わず、君の行動は下の者に影響を与えるんだ。それを覚えて貰わないと困る」

「……」

「窮屈かい？ 今の立場は」

「……ううん、ごめんなさい」

一瞬過ぎた心の動きを見抜かれる。

透明な瞳で笑いかけてくるフィンに、アイズは素直に自省して謝罪した。

「まあそう言ってやるな、フィン。アイズも前衛を諫めるつもりであえてファモールの群れに突っ込んだのだろう。危うく陣形を崩す所だったからのう」

「それを言うなら、詠唱に手間取った私の落ち度もあるか」

ドワーフのガレス・ランドロックと王族であるリヴェリア・リヨス・アールヴがそれ

ぞれ助け船を出す。言いながら二人は意味ありげに視線をやった。フィンとアイズの他にもう一人いる人物。

「……………悪い、俺が勝手に動いたせいで迷惑かけた」

アイズが来るよりも先に来ていた、ベート・ローガが口を開けた。

それを見てガレスは笑いを漏らし、リヴェリアは片目を瞑り口唇をつり上げた。

その一部始終にフィンは苦笑を浮かべ、ややあつてアイズを見上げた。

「アイズ、ここはダンジョンだ。何が起きるかわからない。そしてレフィーヤ達全員が君のように動けないし、戦えない。それだけは心に留めておいてほしい」

「わかり、ました」

頷いて、立ち上がろうとし横に顔を向ける。

「ああ、ベートにはもう少し話があるから残つててね？」

「……あの、ベートさん。ありがとうございます」

助け船を出してくれたことに、アイズは礼を言う。彼は一つ上の階層でモンスター達を引きつける役目をしていた。気付けば消えていたその姿にアマゾネス姉妹の妹、テイオナ・ヒュリテが疑問の声を零し、リヴェリアが答えていたのを耳にしていた。遅れたのはモンスター達を相手にしていたからで、本来なら謝ることではない。

いや、一人で残つたことについては怒られても仕方ないのだが、行動自体に問題は無い。けれど彼は自分のせいでアイズに負担が行つたと言う。それは事実でもあり、事実ではない。確かに第一級冒険者が一人居るのと居ないので戦力に大きな開きが出る。が、上の階層での負担はベートのおかげで大幅に減つていた。だから差し引きで言えば

アイズ達の負担は少なかったのだ。

それでも彼は自分が悪いと主張する。そんな彼だからこそファミリアでの信頼は高い。

垂れていた尻尾をヒラリと一振りして、ベートはアイズへの返事とした。あれこれ言わずにいてくれる彼の対応に、アイズは心地良さを感じる。

リヴェリアのように叱りながら心配してくれることも、ガレスのようにおおらかに受け止めてくれることも、フィンのように論してくれることもないが、彼は否定をしない。

間違っていることを間違っていると言い合はするが、基本的にその者の考えを黙って肯定する。それが彼のスタンスだ。アイズは自分が組織の一員として間違っていると分かっている、それでも強くなりたい。例えばどんな無茶をしたとしても、だ。目指すべきものがある、叶えたい悲願^{ねが}がある。その為の無茶を彼は否定しない。それは彼女にとって、とてもありがたかった。

アイズはそのまま天幕から出た。

「さて、ベート。呼び出しておいて待たせて悪かったね」

ふるりと首を横に振ることでベートは返答する。

「それでだ、ベート。48階層で何故あんな行動を取ったのか、理由を教えてくださいるかな

「？」

フィンは未だに正座を続けているベートに、一応行動の理由を聞く。どういう意図があったのかは分かっているが、これは聞いておかなければならない。きつと彼は何度言っても仲間のために体を張るだろう。けれどそれが言い聞かせない理由にはならない。何度でも何度でも、彼が一人で無茶をしなくなるように、言い続けるのだ。

心優しいこの眷族かそくのために。

「……必要だったからです」

「ベート、今は休息中だ。畏まった言葉は必要ないぞ」

公私の区別をキツチリしているベートが敬語を使うと、ガレスが口を挟む。ベートは反論しようと一度口を開きかけるが三人からの視線に促され、観念したように応えた。

「必要だったからだ」

公私の区別がついているのは良い、だが何時までも緊張状態を続けるのは良くない。休めるとき、息を抜くときを作るのもまた大事だ。その顔に刻まれた刺青と鋭い目つきので、凶暴そうな雰囲気きぶんのベートだが、彼はその見た目と正反対なほど礼儀や口調はしっかりしている。

ベートの口調が丁寧なのは、オラリオでトップクラスのファミリアである彼らの上の

立場となると、殆どが神になるからだ。神でなければLVが上の相手、もしくはは武具防具、遠征に必要な物資などを委託している所謂商談相手だ。そんな者達にわざわざ反感を抱かれる言動をするほど彼は馬鹿ではない、とそれだけの理由だ。

が、これが中々難しい。格下相手にあまり下手に出るとロキ・ファミアが舐められる。けれど、ぞんざいな対応を取ると今度は反感を抱かれて鬱陶しいのである。

「必要か、それは僕たちに言えないほど大切だったのかい？」

「俺の我がままで迷惑を掛けるのが嫌だった。結局、迷惑を掛けたから、意味もなかったけどな」

我がままか、仲間のために体を張ることは。アイズもそうだが、ベートも何が悪いかわかっている。それでも辞める気はない、第一級冒険者まで登り詰める者達は自分を含め何処か我が強い。うーんと唸りながらフィンはポリポリと頬を掻く。

私の強さ、それは譲れない願いであったり、焦がれるような欲であったり、命を賭して叶えたい野望であったりする。その我欲こそが皆を高みに導くのだ。貫き通した誇りがあるからこそ、第一級冒険者は第一級冒険者としてある。それを変えるのはそれまで歩んできた自分を殺すようなもので、強制して変えるものではない。だから彼にこれ以上何かを言うのは戻ってからにしよう。頭の中で結論を出したフィンは取りあえずどんな罰を与えるか意見を聞くことにした。

「ベートに罰を与えようと思うんだけど、どんなのがいいかな？　リヴェリアとガレスは何か良い案があるかい？」

「そうだな、戻ったときの宴会で儂と飲み比べでどうじゃ？」

「それはお前が楽しみたいだけだろう。いや、ある意味罰かもしれないが」

髭を撫でながらガレスが提案すると、リヴェリアが呆れたように言葉を挟む。顔を青くしながらも律儀に飲み比べをしているベートを想像し、笑いながらフィンはリヴェリアに聞く。

「なら、リヴェリアはどんな罰が良いんだい？」

恐ろしい罰飲み比べが候補に上がってベートの顔が引き攣る。味よりも何よりも酒精の強さを求める所のあるドワーフ、常人が飲めば一杯どころか一口でダウンするような酒、それを水でも呷るように飲み干すドワーフと飲み比べなんて死に行くようなものだ。

「そうだな、本抛の書庫の掃除と整理でもして貰おうか。中々時間が取れなくて、手入れが行き届いてないからな」

顔を引き攣らせるベートをチラリと見ながらリヴェリアは書庫の掃除が出来ていないことを思い出し、頷きながらフィンの方を向く。

「あの量の本を手入れさせるつもりか？」

ガレスが本抛の本の量を想像して苦言を呈する。古今東西、様々な種類の本が集まっている書庫はもはや図書館と言っても問題ない状態だ。それを全て手入れするととなると、何時までかかるか分からない。

「うーん、どっちも厳しいなあ。ベートはどっちがいいと思う？」

「もちろん儂と飲み比べじゃろう。のう、ベート」

「書庫の掃除に決まっているだろう。なあ、ベート」

笑いを堪えながら此方を見てくる三人にベートは冷や汗を流す。

飲み比べは途中で誤魔化すことも出来ず、比喻抜きでどちらかが、いや自分が倒れるまで終わらない。二、三日は体調不良に悩まされることになる。

書庫の掃除は膨大な量もさることながら、本自体の扱いにも気を付けなければならぬ。確認をするのがリヴェリアだとするととなると手も抜けない。

どちらを選んでも地獄な罰、確かに効果的だ。

「そうだね、戻ってからの罰はまた帰ってから考える事にしようか。この場では決められないみたいだから」

ぐう、と唸りを上げそうなほど悩んでいるベートの姿を一頻り楽しんだ後、フィンが二人に目配せをする。ガレスは頷き、リヴェリアは片目を瞑ることで返答する。

「それじゃベートも行つていいよ。野営の準備を進めてくれ」

立ち上がり本営から出て行くベートを見送った後、フィン達は先ほどの戦闘を振り返っていた。

「やっぱり中衛を熟せる人員が欲しいね」

「前衛をカバーしつつ後衛にも気を配る、戦場全体を俯瞰しなければならぬからな。フィンの指示である程度サポート出来るとしても、それでは一手遅れる、か」

「現状、それが出来るのはフィン、アイズ、ティオネ、ティオナ、フィンの指示込みでラウル。それと……」

ベートか、と三人は同時に言った。

スベンヤリスト

ジェネラリスト

「中衛は専門家というよりも万能家だから、適性がある人材が少ないのもあるけど、前後衛の知識を覚えないと咄嗟に判断が出来ない」

「アイズ、ティオネ、ティオナはその辺り感覚で動けるからのう」

「考えるよりも先に体が動くというのも貴重だが、同じ感覚型以外の者への教導は難しいからな。ただでさえ人材が少ない上に教えられる者が居なければ人数も増えないのも道理だ」

「だからこそ、ラウルにはしっかりと教えないとね。まあそれはベートにも協力して貰うから問題はないよ」

フィンがそう話を締めるとガレスが髭を撫でながら話題を変える。

「ベートはお主フィンのようなタイプだったか」

「知識からの判断も感覚による決断も出来るからな。フィンもうかうかしてられないんじゃないか？」

「手厳しいなあ、うちの副団長は。けど残念ながら、まだ負ける気はないよ」

「揶揄うような口調のリヴェリアに軽口で返すフィン。気心の知れた古参の仲間達ならではの会話だった。」

「それにしても、アイズとベートには困ったものだ」

「リヴェリアは心配しすぎじゃ。あやつらも第一級冒険者、自らの限界は分かっている」「だからこそだ。自分の限界を知っているから、それを超えようとする。アイズは直向きに、愚直に、ただただ強さを求めている。このままだと、いつか誰にもついて行かない所に行ってしまうかねん。ベートは自分を顧みない、仲間のためなら命を懸ける。それ自体は美德だろう。だが、度が過ぎればただの自殺志願者だ」

眉間に皺を寄せるリヴェリア。顔が整っているだけに、その表情には怖さがある。

「今回にしてもそうだ、上層から落ちてくるだと？ 落下している間は無防備だ、攻撃されたらどうする。下がモンスターだらけで囲まれる可能性もある。問題点を上げればキリがない。だというのに、アイズはいつもいつも——」

リヴェリアはぶつぶつと日頃の不満も出てきたのか、文句を重ねる。そんなリヴェリ

アを見て、フィンとガレスはお互いに顔を見合わせククツと笑みを零す。自分たちの主神^{ロキ}が言っていることを思い出したからだ。なるほど、これは確かに過保護^マな母親だ。「……おい。何を笑っている」

ジトツとした目で二人を見るリヴェリアに、フィン達は堪えきれず声を上げて笑い出した。ロキ・ファミリア古参の者達の穏やかな雑談は、その後食事の準備が出来たとベートが呼びに来るまで続いた。また呼びに来たベートが顔を出した時に思わず三人が笑い出したのも、あるいは仕方のないことだったのだろう。胡乱な目を向けるベートを促しながら、三人は食事の場へと歩いて行ったのだった。



（顔見ただけで笑われるって、酷すぎないか？ いや、うちのファミリアの仲間が俺に厳しいのは今に始まったことじゃないか。あー早くホームに帰って眠りたい）

引き締めた表情をしながら、内心で愚痴をこぼすベート・ローガ。

ベート・ローガはあまり感情を表に出さない。不愛想で言葉が足りないとよく言われる。

同じファミリアの劍姫アイズ・ヴァレンシユタインのように人形と呼ばれることこそなかったが、やはり身内の者以外に積極的に話しかけられることはあまりない。

こことは別の、本来の正史と言える世界において、彼は弱者を見下し好戦的な性格だった。その態度も彼なりの発破であり、見下すことで優越感に浸るのではなく、上位の者が下位の者を見下さなければ、下位の者は奮起しがむしやらにならない。下位の者が矜持と目的をもって上を目指す上位の者の足を引くことを良しとしない、そんな彼なりの考え方から態度だった。現に彼は常に上を目指して命を懸けていた。

彼が嘲るのは立場と過程に満足し胡坐をかいている者達で、弱くとも上を目指すものには一定の理解を示していた、まあ言葉が悪いのは変わらないが。

そんなベート・ローガだが、彼は正史で『誤解されずにはおれない男』という評価をされている。これは彼の言動態度がそのまま弱者を見下し、力をひけらかしているようにしか見えないからだ。

が、正史から外れたこの世界でも『誤解されずにはおれない男』という評価を頂いている彼だが、周りの認識と彼の認識を比べると違う表現ができる。

『勘違いされずにはいられない男』と。

これは正史とはずれた世界において、性格と言動、考え方が少し変わった一人の狼人の織り成す「喰い違う物語／ウルフ・ヒストリア」である。

始まりの一？

ロキ・ファミリアの団員に襲い掛かろうとしていたフォモールが、上空から落ちてきた物体によって轟音と共に碎け散った。その衝撃はフォモールを打倒しただけでなく大荒野の大地にもクレーターを生み出す。

砂塵が舞うクレーターの中心、紅い滲みとなったフォモールの上でゆっくりとベート・ローガが立ち上がった。

視線を素早くめぐらし周りの状況を確認する。ベートが作り出したクレーターに巻き込まれ、尻もちをついていた猫キャットヒール人のアキに手を貸し立たせる。傷付いた仲間達を見て、顔を顰めながらベートは思う。

……これはいったいどういう状況なんだ、と。

ベートからすれば、上の階層でモンスターとの生死を賭けた熾烈なデッドヒートを繰り広げ、モンスターの足の間を潜り抜ける為にスライディングを敢行し、そのまま流れるように穴に滑り落ち、穴から抜けたと思えば衝撃と共に気が付けば地面が血に染まっていた。

という様に状況がさっぱり分からないのだ。

穴を抜けた先で戦闘が起こっているのは見えた。戦闘をしている集団がロキ・ファミリアだというのも予想が付く。自分の落下地点でモンスターを押し潰したのも何となく分かった。

けれど戦闘を中断してまで此方を注視して、更に何か妙な熱のこもった視線を受ける理由は全く想像出来ない。突き刺すような視線。周りを見渡すと仲間たちがこちらを見ている。タラリとベートの背を冷たい汗が伝う。

……潰したのはモンスター、フォモールだけの筈。仲間を巻きこんではいけないから問題は無いよ、な？ 身内殺しとか冗談でも笑えねえ。

それに足が痺れて痛い、今もゆっくりとしか立てない。

足の防具兼武器、フロスヴィルトの性能とステータスの恩恵でだいぶマシだがダメージがデカイ。

痛む足と周囲の視線によって心身共にダメージを受けながら、ベートは誰よりも頼れる団長に問いかける。

「——どういう状況だ」

端的にそれだけを聞くベート。説明が下手という訳ではないが、色々といっぱいっぱいのベートが言葉に出来たのがこれだけだったのだ。それに団長であり聡明な彼、フィン・デイルナなら察してくれると思つてのことだった。

いや本当に、どういふ状況なんだ団長。色んな意味でドキドキしながら聞いた返答は——苦笑。

「敵の物量が多くてね、前線を維持することが難しいんだ。リヴェリアの魔法がもうすぐ完成するから、盛大な遅刻をしてきた君には大いに働いて貰うよ？」

身内殺しは逃れたようだ。
最悪の事態

助かったのはいいんだが、団長、働くつて今からか？　まだ足が痛い……そんな笑顔でいいかいつて言われたら断れねえ。

第一級冒険者になっても変わらぬ、いや寧ろ無理が効くようになった分厳しくなった団長の指示に、ベートはやるせなさからフツと息を吐いた。否とは言わない、団長が厳しいのはベートの中では確かなことだが、それ以上にこの小さくも頼もしいリーダーを信用し信頼しているのだ。

無茶は言つても無理は言わず、限界まで力を振り絞らされても限度は超えさせない。人を使うことが抜群に上手いのだ。それに後ろでこのうと指示を出すだけでなく、困難があれば誰よりも先に立ち向かう団長はベートの憧れでもある。失敗もあつた、仲間が死んだこともあつた、それらを乗り越え糧にしてロキ・ファミリア団長、フィン・ディムナはここにいます。仲間の死を弔い、毅然とした態度で最後までいた彼が一人、誰もいない通路で壁に拳を叩きつけ、その後直ぐに顔を上げ歩き去つていった姿を見たことが

ある。

その背に、ベート・ローガは魅せられた。狼ウエアウルフ人は強さを尊ぶ。それはほとんどの場合肉体的、戦闘的な強さのことだ。だが、ベートはフィンフィンの在り方にこそ敬意を表す。自分には出来ない考え方、振る舞いに憧れた。

格好良グハクヨウかつたのだ。

無いものねだりの無様な憧憬だと、自分を嘲つたこともある。それでも捨てられなかった。体ばかりが大きくなっても、一級冒険者になっても、周りから強くなつたと言われても、あの背には届かないという考えは変わらない。焦アツがれるように我武者羅になつて目指すこともできないくせに憧れを捨てられない、本当に救いようもないほど滑稽で無様。

意識を切り替えてベートはフィンからの合図を待つ。

信頼する団長の指示に基本的には否とは唱えない。彼が指示をするということは必要なのだろう。そう思えるほど彼には実績がある。ならば自分のすることは決まっている。痛みを引いてきた足を曲げ力を貯める。引き絞られた弓のように、放たれる瞬間を待ち——

「頼んだよ、ベート」

——怒られない内に、ここを離れるッ！

憧れであることなど関係なく、見た目子供で中身がオッサンという年齢詐欺にも程がある団長様は怖いのだ——とても。生きてきた年月に裏打ちされた知識と勘、なんかもう心を読んでるのではないかと思うような会話の展開の仕方。これだけでも怖いのに魔法を使った時なんか修羅もかくやつてくくらいだ。普段温厚な人がキレると怖いというのを体現してやるような人だ、この団長様は。だから俺のする行動は決まっている。頷いて余計なことを言われる前に全力で離れる！ 後ろから聞こえた頼んだよという言葉葉は聞こえない。

どうせこの後に説教をされるのは決まっているが、働き次第では情状酌量の余地があるのでは、と砂上の楼閣のように淡い希望を抱きながらベートは駆ける。一步目から最高速に達し、二歩三歩と進む度に前線へと近付く。瞬く間に盾役の者たちの元まで走り寄り、するりと間を抜けフォモールの足へと蹴撃を見舞う。速度が乗った蹴りは、ベートのスキルの効果も相まって一撃でフォモールの足を吹き飛ばす。硬く強靱なフォモールの肉体が冗談のように吹き飛ばさずは、分かっているも団員たちに驚愕を与えた。支えが無くなり崩れ落ちるフォモールの体を二撃目の蹴りが襲う。倍どころでは済まない体格差の相手をもともせず弾き飛ばした。

飛ばされたフォモールは仲間を巻き込み倒れ、隙を晒す。それを見逃さず次々と攻撃を叩きこみフォモールを灰へと変えるロキ・ファミリアの面々。苦戦し一度は突破されてしまった相手。それを連続撃破することで士気が上がる。その場で仕留めず、飛び道具替わりとしてモンスターを利用し次の行動に繋げる。鮮やかな手並みを見せられ、闘争心が掻き立てられた。自分たちが苦戦する相手だとしても、一級冒険者たるベートには周りを見て、倒すだけでなく利用する余裕があるのだ。その差が悔しくもあり、誇らしくもある。仲間たちを一瞥し後は任せると言うように他の場所へと向かうベートに応える為^に奮い立つ。

盾を掲げ、槍を構えて剣を振るう。漫然と行動をするな、状況を見ろ、隣にいる仲間を信じろ。助けられた、また助けられた。何度も何度も繰り返された光景に、慣れることだけは絶対にするなッ。それを許容してしまつたら二度と一級^級冒険者の仲間だと誇れなくなる。

だからこそ——声を上げろ、歯を食いしばれ。自分達は大丈夫だと、言葉ではなく行動で示せ。何よりも雄弁な行動によって見せつけろ。

共に進み共に笑い共に居る為に。

吼えろ、俺達／私達は戦えると!!

『おおおおおおおッ!!』

地下深くから天まで届けと言わんばかりに、咆声が戦場に轟いた。



(……しくじった)

ベートは殺すつもりで放った攻撃だったが、フオモールが思いのほか硬く、また足の痺れが完全に取りれていなかったため半殺しで弾いてしまい、バツが悪くなり他の場所へと向かった。もちろんその場が立て直していることを確認してから行動している。手が少し足りないというところをベートは動き周り、ナイフを投げ双剣で斬り拳足を打ち込んだ。

すると、突然仲間たちが吼えた。一斉に上げられた咆哮に、ベートはたじろいで動きを止める。

何だ何だと周りを見渡すと狂乱一步手前の覇気を見せる仲間たちがいた。

……主神^{ロキ}の趣味で集められた仲間は見目麗しい者が多い。綺麗可愛い精悍凛々しい

など形容の仕方は分かれるが、皆一様に容姿が整っている。そんな集団が血みどろになつても声を上げ覇気を纏いながら戦っている。慣れているといえどそれまでだが、さすがにここまで荒ぶるのは珍しく、ぶつちやけ怖かった。

ロキ主催の宴会で開かれたく地獄の耐久飲み比べ、勝利の栄冠は誰の手にくで酔つ払いと化したロキが本人の許可なく決めた景品、リヴェリアに抱き着くを實行しようとした男たち（ロキ含め泥酔状態）を怒り狂つたエルフを筆頭とした女性たち（こちらも大概に酔つていた）がボコボコにした時並みの気合いだ。仲間内の戯れと侮るなかれ、その時の戦闘が原因で実に三週間もロキ・ファミリアは機能停止一歩手前に追い込まれていたのだ。ホームでの出事だったからよかつたもののこれが外の酒場で起こつていたらぞつとする。

何が一番辛かつたかと言うと、三週間の間女性団員が男性団員と一切会話しなかつたことだった。必要最低限の事務報告はしていたが私事での会話は一切ない。男女比がロキの趣味で女性に偏っているためにただでさえ肩身の狭い男たちは自分たちのせいとはいえ、針の筵どころか鋼鉄アイアンメイデンの処女に入れられた罪人のような日々を送つていた。例外は早々にティオネから大量に飲まされぶつ倒れたフィンと単純にひたすら飲むことに集中していたガレス、そしてたまたまりヴェリアの横に座つていたためその催しに参加するという選択肢がなかつたベートだけだ。本人が横にいるのにわざわざ死地に向

かう愚は流石に犯さなかつた。

ギスギスした雰囲気の中、どちらにも角が立たないように立ち回らなければならなかつたベートは大変苦勞した。友好關係にあるファミリアとの連絡や交渉にも、殺氣立つた面々に行かせたらどのような事態に陥るか分らないと、テイオネ、リヴェリア、ガレス、フィン、ベートで回さなければならなかつたため、仕事に忙殺されかけた。冒険者が冒険以外、それも事務仕事などに殺されるなど絶対に嫌だつた。最後にはリヴェリアが悪乗りした男性団員も悪いが、過剰に反応した女性団員も悪いと両成敗で手打ちとした。エルフの者達には同じようには言わないが、自分もファミリアの一員なのだから必要以上に崇めて輪を乱す行動は控えるようにと釘を刺した。

因みに、元凶のロキは丸一日木に吊るされていた。食事はアイズが食べさせていたので罰かどうかは意見が分かれたが。その時の事を思い出し憂鬱な気分になっていると、ヒュリテ姉妹が寄つてきた。

「ベート来るのおつそーいッ!! どこで道草を食つてたのー」

ブンブンと大双刃ツルガを振るい、フォモールを細切れにしながらヒュリテ姉妹の妹の方、テイオナが話し掛けてくる。数が多いことに辟易していても、障害にはなり得ないとはかりに屠つていく。

「……一個上の階層でモンスターと追いかけてっこだ」

双剣を扱いながらベートは先程までの状況を思い出しげんなりする。倒せども逃げども湧き、追いかけて、増え続けるモンスターの集団。気分が落ちても仕方ないことだった。

「団長の指示も聞かずに勝手に動くからそうなるのよ。今までサボってた分も働きなさいよ」

自業自得だと告げるヒリユテ姉妹の姉の方、テイオネがナイフを飛ばしモンスターの眼を抉る。怒りのボルテージが一定のラインを超えない限り、彼女は非常に優秀な遊撃だった。

「デイルナ団長と同じ事言うんだな」

これ以上この話をされてはたまらないとベートはテイオネの愛する団長の話題を出して話を逸らす。

「ホントっ!? やっぱりと私と団長は心が繋がってるのね!!」

きやー、と褐色の頬を薄く染め喜色満面の笑みを浮かべながらククリ刀を薙ぎ、ファモールを斬殺する。

上機嫌に得物を振り回す姉妹に、ベートは無いとは思うがこのままだと嵐のような剣撃に巻き込まれるのでは? と不安を覚えた。先ほどから掠りそうになっているウルガから離れるため、ベートは跳躍した。

モンスターの灰になる前の軀を飛び越え、取りあえず牽制にとナイフを味方に当たらない程度に狙いを付け飛ばす。ホルスターに仕舞われたナイフを飛ばすうちに気が付く。

——魔剣がない。

ベートの顔から血の気が引いた。おい嘘だろ、あれ一本でいくらするとツ!? 空中であちこち手で触り、体を捻って魔剣を探してようやく見つけた。足ではなく腰のホルスターへと仕舞っていたようだ。

一先ず安心したベートは着地するために地面を見ようとすがその途中、今まさに棍棒を振りぬかんとするフォモールの姿が視界に入る。

(は?)

間の抜けた声が胸中で漏れる。

——空中、逃げられない、反撃不可、援護間に合わない、ガードも厳しい、魔剣の使用——却下、フォモールを倒しても棍棒の勢いは消えない。次々と浮かんでは消える選択肢、ベートは躊躇しつとも決断した。

迫ってくる棍棒に足を向け、膝と足首を柔らかく維持。上体をぶれないよう固定。その瞬間を待つ。

細く細く尖らせた精神が体感時間を限界まで遅くする。ゆっくりと流れる世界の中

で足の裏に棍棒が触れた。焦るなど自らに言い聞かせ、膝をクツションにしながら足を曲げ始める。チリチリと脳がひりつくような緊張に晒されながら限界まで足を曲げきり、衝撃をある程度殺すと次は膝を伸ばしていく。棍棒を蹴るのではなく乗るように着地し、次いで振り切られる棍棒の威力と己の脚力をもつて砲弾のように飛び出した。引き伸ばされていた体感時間が元に戻る。

ベートは戦場を高速で横断し向かう先にいたフォモールの魔石を打ち抜き灰にする。飛んで行った先でベートはくるりと一回転して勢いを受け流し、体勢を整えながら今度こそ地面に着地した。

(な、何とか成功した。……足が地に着いてるつてのはこんなに安心できるもんなのか) 成功した安堵と気疲れから、ベートは少々顔色を悪くしながらも付近を見渡す。

降り立った場所では仲間たちが盾を押し込み、矢で牽制しながら戦線を広げていた。怒号や雄たけびが飛び交う中、ベートの耳は朗々と呪文を詠唱するリヴェリアの声を聴き取った。もうすぐ完成しそうな呪文の進行具合から、これ以上戦線を押し広げても意味はないと判断し仲間たちに声をかける。

「そろそろ下がれ、団長にどやされる」

それに、これ以上戦線を広げられると援護に行くのもしんどい。先ほど向かって来る棍棒に乗ると言う良くて負傷、悪ければ重症という賭けをしたベートは精神的に疲弊し

ていた。

(もう二度とやりたくねえ)

自らの注意不足が原因だが、それでも不満が漏れる。

「ふむ、ようやくと戻ったか」

不必要に広げていた戦線を固定し、維持することに移行する前線から一人のドワーフが他の団員と入れ替わりに壁役から抜け、ベートに歩み寄る。

ガレス・ランドロックはロキ・ファミア古参の一人にして前線の要だ。それは精神的にもそうだし、何よりも実力が抜きん出ている。

いや、抜けて大丈夫なのかよ。このタイミングで説教とかはやめて欲しいんだが。

チラリと前線を見やりながらそんなことをベートが考えていると、ガレスは笑いながら言う。

「そんな顔をするなベート。これも経験だ」

この状況で抜けるとか相変わらずスパルタだな、おい。

嘸み合つてるように嘸み合つてない会話をしながら、ベートは話しかけてくるガレスから思わず視線を逸らす。そのスパルタ具合にベートが過去に受けた愛地獄の鍛練の鞭を思い出しそうになったためだ。訓練の内容が耐えろつてなんだよ、せめて受け方とか逸らし方にしてくれよ。ノーガードでL.v. 6の拳貰うとか加減したとしても岩ぶつけられ

てるようなもんじゃねえか。バシバシと背を叩くガレスの手の感触によって、視線を逸らすことで思い出さないようにした過去がまざまざと蘇っていた。

本陣を見ると団長が撤退の合図を出していた。これ幸いとベートはLv. 5の耐久を抜いてくる背後の手をのけながら呟いた。

「合図だ」

「む、やつとか。アイズ!! 戻れえッ!」

ガレスのよく通る声は、雑多な音がそこかしこで響く戦場の中にあっても端々まで伝わる。基本的に空を飛べない者が大半を占める地上の者たちの常識を「そうなの?」と言わんばかりに戦場を自在に跳ね回っていた金色の髪の少女、アイズ・ヴァレンシユタインが大きく飛んで陣へと戻る。

その瞬間、地面に描かれた翡翠色の魔法円が強く強く輝いた。

「レア・ラーヴァテイン」

たった一人の魔法が、冗談のようにファミリアの面々が苦戦していたモンスターを焼き尽くす。

ロキ・ファミリア古参の三人。フィン・デイルムナ、ガレス・ランドロツク、そして副団長にしてLv. 6——エルフの王族ハイエルフのリヴェリア・リヨス・アールヴが使う魔法を見る度にベートは思う。

……絶対にリヴェリアだけは怒らせないようにしよう、と。

わりと高い頻度で説教はされても、怒られたことは少ないベートは決意を新たにし、歓声の上がる戦場の中で、さてこの後の説教からどうやって逃げようかと顔を強張らせながら考えていた。

それが無駄な努力だったと思い知るまであと少し。

争乱の二

鋭く強靱な爪と、硬い鱗に覆われた前足が勢いよく振り抜かれる。眼前の空間を削り取らんばかりの一撃。

その体躯に似合わない素早い動作で行われた攻撃は、当たってしまったえば例え一級冒険者だとしても、ただでは済まない破壊力を秘めていた。自らのテリトリーを犯そうとする愚か者たちに、モンスターは敵意を滾らせ牙を剥く。

カドモス
強竜。

強竜の名を冠する、現在発見されているモンスターの中で階層主を除き最強の存在である。

幾多もの冒険者、モンスターを屠り続けてきたカドモスの攻撃は、しかし自分よりも小さく矮小な敵対者に当たることはなかった。

——仕留められなかった。

そうカドモスが判断する前に体に幾つもの衝撃が奔る。振り抜いた上腕部から背にかけて受けた幾つもの衝撃は、ダメージと言うほどのものではない。しかし自らの身に攻撃を受けた。そのことがカドモスの怒りを誘う。敵意を滾らせながらも、どこか作業

的に動いていたカドモスが明確な殺意を向けた。

腹の底から湧き上がる怒りと共に流れる呼吸が、唸り声としてダンジョンに響いた。ドンツと苛立ち紛れに打ち付けた尾が地面を砕く。攻撃ですらないただの動作、人が足踏みするのと変わらぬ筈のそれが齎す結果は、見ただけで相手が規格外の怪物だと理解させられる。

カドモスに殺意を向けられる相手。攻撃を加えたベートは素早く離脱し、離れて様子を見ていたフィン達の元に戻った。

「どうだった？」

「……ラウルの攻撃じゃ厳しい」

「まあ、そうじゃろうな」

「うう、力不足ですんませんツス」

フィンの言葉にベートが攻撃を入れた感触から推測を語り、ガレスが大斧を担ぎながら頷き、ラウルが肩を落とした。

「それにアイツ、慣れてやがる」

「……そうか。ありがとうベート」

ベートがカドモスを見据えたまま言った言葉に、フィンは口元に手をやり少し黙った後頷いた。

何度か交戦したことがあるカドモスだが、それでもこうして強さを測るのはモンスターにも個体差があるからだ。強化種のように異常個体というほどではないが、それに微妙な差異がある。ダンジョンから生まれたその瞬間から戦えるモンスターだが、冒険者と戦い生き残った個体は強い。

なぜならモンスターも経験し学習するのだ。敵がどういう攻撃をしてきてどういう動きをするか。どういう敵が脅威度が高いのか。本能で察知している事柄を経験として知覚する。そもそもが能力に差のある冒険者とモンスターだ。それが戦術的な行動を取るようになれば当然、危険度は跳ね上がる。敵意を集め、囷となろうにもその考えが看破され後衛が狙われる。こう動くという固定観念が危機を招く。そうならないために、相手の反応と個体としての差異を最初に測ることで先入観からの遅れを取らないようにする。

その情報が生死を分けることになるかもしれない。だからこそ、確実に生還しモンスターの反応から情報を正確に判断し分析できる人材——今回であればベート——に役目を託すのだ。

離れていたフィンから見ても、ベートの見立てに間違いはないと判断した。カドモスの動きがどこか作業的だったのだ。殺意に任せただけの加減のない一撃ではなく、コイツらはこの程度の攻撃で殺せるという思考が透けて見える行動。

いいだろう。慣れているなら、舐めて……いるならそれすらも利用させてもらう。フインの顔に闘志が浮かぶ。

僕を、僕の誇る仲間たちを侮るといふのなら、その対価は命を持つて贖つてもらおうか。

フインのその姿に呼応するようにガレスとベートの雰囲気が変わる。

闘争の気配に冒険者として戦意が昂る。

ラウルはその姿に惹き付けられる。

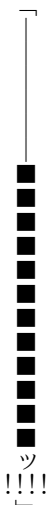
世間話をするように軽く、危険な役割を与えるフインにも。それに反発することなく頷き、役割を全うするベートにも。指示を出したフインと指示を与えられたベート、双方を信頼していながらも不測の事態に備えて隙を見せないガレスにも。遠い背中、フインから集団戦での手ほどきを受け、自身もLv. 4であるから分かる彼我の差。いくら強くなっても、経験を積んでも追いつける気がしない。自分はあるなにも仲間を信頼出来るだろうか、信頼を向けられるようになるだろうか。

「力が足りないと思うのなら今できることを考えて強くなっておくれよ、ラウル。本命はガレス、遊撃として僕とベート、ラウルはサポートで行く。いいかい？」

「任せておけ。久々に腕が鳴るわい！」

「ああ」

「ハイ！ 全力を尽くします！」

「ツ!!!」

翼を開き、遙か遠くの天空にまで轟かせるようなカドモスの咆哮を合図にして、冒険者達とモンスターの殺し合いが始まる。

▼△▼△▼△▼△

剣戟が放たれ火花が散り、壁が碎け、咆哮と鋭い指揮が飛ぶ。付かず離れず、冒険者は幾重もの攻勢を掛ける。戦端が拓かれてから今まで、フィン達は休まず戦い続けた。

カドモスが己の体を弾き飛ばすような勢いでラウルに突っ込む。世界そのものが迫ってきたかのような圧迫感に竦みそうになる体を叱りつけ、ラウルは大きく横に避ける。

「!!!」

「かッ!?! ……あえ?」

しかし、その行動に対してカドモスは自身の身体能力に任せた急激な方向転換を行い

咆哮^{ハウル}を放った。見えない攻撃がラウルを捉える。突進を躲し一呼吸置こうとした瞬間を狙いすました、許容量を大幅に超えた音が、ラウルの体と思考をを縛りつける。焦点がぶれて視界が定まらない。呆然と立っているのは危険だと本能が警鐘を鳴らす何が危険なのかということまで思考が至らない。近くで、いや遠くで誰かが叫んでいる気がする。

乱杭歯を見せつけるように、首を傾け横に広くその顎を開き、カドモスはラウルに突っ込んで行く。鉄板すら易々と引き千切りズタズタにするであろう攻撃。ぼんやりと立ったままのラウルをそのまま噛み千切ろうとし――

「ぬう、ウオオオ!!」

「ぐツ、流石に重いね。ベートー!」

「分かってるツ!」

滑り込むようにカドモスとラウルの間に入ったガレスとフィンが各々の武器を差し込み、閉じようとする顎を押し止めた。牙と武器がガチガチとぶつかり合う。カドモスの突進を正面から受け止めた二人の体が軋みを上げるが、地面を削り押し込まれながらも一歩も引かない。その隙に、ベートがラウルの胴を掴み離脱する。カドモスは標的を変え、ガレスをその武器ごと覆うように噛み付き、持ち上げて地面に叩きつけた後、迷宮の壁に吐き捨てるように叩き付けた。邪魔な相手が一人減ったことに嬉し気な声を

漏らし、カドモスはフィンに視線を向ける。

一時的とはいえカドモスと一対一。ほとんどの冒険者なら死を覚悟する状況でも口キ・ファミアの団長は不敵な笑みを滲ませて、己が武器を構える。

「来なよ、少し僕と遊ぼうか」

ガレスの行方を目端に捉えながらも、フィンは真つ向からカドモスの猛攻を防ぎ続ける。カドモスの爪を、牙を、尾を、腕を逸らし、躲し、往なし、どうしようもない攻撃のみを受け、随所で反撃を加える。槍が閃き、小柄な体躯が軽やかに動き回る姿は演武のように流麗で、その実、無駄を排した実用的な動きだった。

フィンが一人でカドモスと相對している間に、ベートは抱えていたラウルをカドモスから離れた位置に降ろすと、懐から取り出した回復薬ポーションを頭からぶちまけた。

「ぶあ、げほつごほ！ あ、れ？ ベートさ」

「態勢が整ったら来い」

ラウルの目に理性が戻ったのを確認したベートは一言だけ残してフィンの元に向かった。急な展開に目を白黒させていたラウルは、未だにぼんやりする頭を振って意識をハッキリさせた。そして自分のせいでどういふ状況になったのかを自覚すると情けなさに泣きそうになる。だがベートの言葉を思い出し呼吸を整える。反省は後でいくらでも出来るのだ、今は一刻でも早く戦線に復帰することが肝要だ。

「……ハツ……ハツ……うあ」

戦闘による高揚で気付かなかつたが、一時的に安全圏まで離れたことで、一気に今まで意識していなかった疲れをラウルは自覚した。カドモスは幾らか傷を負っているがその暴威は未だに健在、攻勢の激しさは最初よりも増している。衰えることのないカドモスの体力、殺意と憎悪に塗れた視線に肌が泡立つ。一撃でも貰えば死に直結する極限状態の戦闘。この中で自分が一番弱いという心理的圧迫感、いつ終わるとも知れない殺し合いに、ラウルは疲労を隠せなかつた。

滝のように汗が流れ、肌に張り付く衣服が不快だ。呼吸は浅く荒い。喉にへばり付く唾が鬱陶しい。武器を持つ手がぶれそうになる。目の奥がじくじくと痛み、耳の傍で血管を流れる血の音がゴオゴオと鳴っている。

受けた傷ははせいぜい軽い擦り傷と打ち身だけで先ほど掛けられた回復薬のおかげで完治している。そもそも、軽症でなければ無残な死体になっていただろうから傷の多い少ないは関係ない。嵐のように暴虐を尽くすカドモスの周囲を迅速に動き、武器を打ち振るうフィン達の姿を見やる。巧みに槍を操り、他に比べ脆い箇所へと確実に攻撃を当てる続けるフィン。合流した勢いそのまま、速さで翻弄しながら敵意を常に一定量集めるベート。

そして。

「どっせいー！」

「■■■ッ」

「ふん、今のは効いたようじゃな」

壁に叩き付けられたことなど無かったかのようには復帰し、カドモスの巨軀がくの字に曲がるほどの痛撃を叩き込むガレス。硬い外殻を物ともせず粉砕し、肉を押し潰した大斧を引き抜き彼は笑う。普段は後進の育成のためにサポートに回ることの多いガレスは、久々に存分に戦える機会を大いに満喫していた。

滾る滾る——滾るわい！

反撃として振るわれた尾による薙ぎ払いを大斧で受け止め後退する。腕が痺れ、骨身に染みる。やはり戦いとはこうでなくては！ 集団戦での戦いも楽しめるが、最前線で己が身を晒し鍛え上げた技を力を試す戦いこそ血が滾るのだ。殴り殴られ斬り刺され、熱き闘争のその先を、勝利を掴むために前へと進め！

心底楽しそうに突撃するガレスを見て、フインはカドモスの背の一部に槍による斬撃を加えながらやれやれと息をつく。本命はガレスだと言ったのは自分だが、こうまで張り切るとは思ってもみなかった。

「アイズ達に当てられたかな？」

荒野^{モイトラ}での戦闘、指揮に重きを置いていたため不完全燃焼だったのだろう。そこで存分

に暴れるアイズ達を見ていたのだから仕方ないと言えればいいのか、いい年をして堪え性のないと苦言を呈するべきか。

フィンがカドモスの翼による薙ぎ払いを屈んで躲し、戦闘狂の気がある仲間の事を考えて、ガレスだけでなくアイズもティオオネもティオオナもベートも戦闘狂そうだと思い出した。元々の気質なのかガレスに感化されたのか、頼もしくも苦勞させられる仲間達だと結論付けた。これ以上考えても仕方ない、それに自分も大して変わらないのだから。今まさに続けている戦闘に芯を熱くしながら挑んでいる自分にあれやこれやと指図する資格はない。

カドモスの反応が良くなってきている。

フィンは観察を続けているカドモスを見やり、眼を細める。ならばと、フィンはチラリとベートと視線を交わし、すれ違うように立ち位置と武器を交換した。ただすれ違っただけにしか見えないのに武器が入れ替わっているのはどのような手品か。

フィンが双剣、ベートは槍を手にする。フィンは双剣を持ち、ベートが使っていた時よりも更に近距離で戦う。敵の懐深く、小さい体が長所となる距離で幾つもの斬閃が奔る。硬い鱗を剥がし肉を刻み傷を増やす。熟練したその剣捌きは、愛用の得物だと言われても遜色のない技量だった。ベートは槍を構え、飛びのいた後に突貫。速度と捻りを加えた一撃が深々とカドモスに突き刺さる。加速し、勢いに乗せなければ貫くことの出

来ない強固なカドモスの肉体にベートは舌打ちをする。槍を素早く引き戻し、血を払うように手の中で回転させた。

「いいね。随分様になつてるよ、ベート」

「……嫌味にしか聞こえないんだが」

「いやいや。本心だよツと、ベート!!」

「ああ。フツ!」

茶化すように声をかけて来るフィンに少しだけ眉を顰めながら言葉を返したベートが槍を水平に構える。それに重さを感じさせない動作で細い槍の柄にふわりとフィンが飛び乗った。ベートが槍を振り切ると同時に跳躍、高々とフィンがカドモスの上空へと身を投げ出した。ベートは振り切った勢いそのまま一回転して、フィン目がけて全力の投擲。空気を切り裂いて飛んでいく槍を一瞥し、いつの間にかフィンが手放していた双剣が地面に落ちないうちに掴み、ガレスの元へと走り出す。空中にいるフィンが投げられた槍を掴み着天。天井へと足を付け、力を溜める。曲芸のような過程を挟みながら、それぞれ本来の持ち主の手に武器が戻った。

曲芸にしか見えない動作も一級線の冒険者が意図を持って行えば、それは一つの戦術となる。

カドモスは慣れ始めていた敵手の動きと武器が急激に変わったことに動揺し、効果的

な反撃が出来ない。学習するということは脅威でありチャンスでもある。行動に本能だけでなく思考が絡むならば、それは冒険者の、フィンの土俵だ。読みあい化かし合い、いいだろう。オラリオのトップとして数多の者達から嫉妬と羨望を集めながらも立ち回ってきた自分たちが、付け焼刃の頭脳戦などに負けるものか。

まあ、人ならざるモンスターの動きから相手の考えを読み利用するという、超人的な技能はフィンの経験の賜物であり他の者が簡単に真似出来ることではないが。

「ガレス」

「今度は儂か、振り回されるんじゃないぞー」

ホルスターに双剣を収めたベートが声をかけると、楽し気な声色でガレスが自身の武器を投げ渡す。大斧の重さに顔を顰めながらも、カドモスの右前脚の前に移動し大斧を大上段に振りかぶる。ガレスはカドモスの左前脚に向かい、その拳を血管が浮かび上がる程に握り絞めた。

カドモスはみすみす自身の攻撃圏に来た二人を押し潰そうとする。ちよこまかと鬱陶しかった敵を殺せるという愉悦を滲ませ渾身の叩き付けをカドモスは放った。

——しかし。

「おおおッ!!」

「ぬううううん!!」

轟音。

各々がぶつかり合った衝撃が戦場を揺らした。

カドモスの体の中でも特に強固な爪と筋肉に阻まれて明確なダメージを与えられなかったが斬撃と拳打、同時に放たれた二人の渾身の一撃はカドモスのそれと拮抗し、ベートとガレスの足を地面に減り込ませながらもカドモスの動きを一瞬だけ完全に停止させる。

「そろそろ倒れてもらおうよッ！」

「■■■■■■?!?!? ——アア……」

—— 刺突。!

カドモスが硬直した瞬間、迅雷のように天井から地面に向かい全力で跳び落ちてきたフィンの槍がカドモスの頭部を貫いた。硬く強固なカドモスの外殻と骨も、落下する勢いすらも加算したフィンの一撃には耐えることが出来なかった。

カドモスが沈む。

槍を引き抜きフィンはカドモスの頭部から飛び降りてガレスたちの方に歩いてくる。

いつまでも無様を晒してはられない。ラウルはまだ荒れている呼吸を無理やり収めると、三人の元に駆けだした。

「儂が本命ではなかったのか？」

「時と場合によりけりだ。それにどれだけ僕とベート、それにラウルがフォローに回ったと思ってるんだい？ 頑丈なだけが取り柄の誰かと違って僕たちは繊細なんだから、あまり無理させないで欲しいね」

「ぬかせ。ラウルはともかくお主とベートは殺しても死なんだろう」

「俺からしたら団長たちが死ぬ状況が想像出来ないんですが……」

フィン達が会話するなか、ベートは一人カドモスを見ていた。

「ベートさん？」

どうしたのかと思いつラウルが問いかけるが返事はない。普段どんな些細なことでも答えられないこと以外は言葉少なにであつても、きちんと返答するベートらしくない態度。ジツと、いつそ睨み付けていると言われている方が納得できる程の視線をカドモスに向けていた。

「フィン、仕留めたか？」

「感觸的には頭部を確実に貫いた筈だけど……流石はモンスター、いや強竜カドモスと言つた所か」

「まさか、まだ」

異変に気付いたガレスがベートから返された大斧を持ち直し、フィンに問う。苦虫を噛み潰したような表情を浮べてガレスに言葉を返しながら、フィンは武器を構える。

モンスターと冒険者の殺し合い。最後の最後までどうなるか分からない戦いが再開された。

争乱の二？

——以前、こんなことがあった。

ファミリアの一人の男が、鍛冶師^{スミス}から特定のモンスターからドロップするアイテムを取って来るように依頼された。それは男がその鍛冶師が作った武器をどうしても欲しいと願い、駄目だと言う鍛冶師に何度も何度も頼み込み、根負けした鍛冶師が付けた条件だったのだ。

別段、その武器が特別に性能が高かった訳ではない。だが、その武器は男の技量に見合わぬ代物であり、武器の性能を自身の実力と勘違いした結果、死ぬことになるかもしれないという危惧から来たものだった。

その辺りの教育は自身のファミリアの先達が見守るものであるが、新しい武器を手に入れ性能を試すために、その足でダンジョンに潜り、死んでしまうという話はオラリオでは枚挙に暇がない。

鍛冶師のファミリアと懇意のファミリアの眷属相手だからこそその配慮であり、鍛冶師の男の善意でもあった。

自身の力量に見合わぬ武器であると男にも分かっていた。けれどどうしてもその武

器が欲しかった。握った時の手に馴染む感覚。自身の為に詠えたかのように心地よい重さと取り回し易い長さ。過度の装飾はなく、シンプルでいて美しい造形。武器の全てが男の琴線に触れるものだった。

だからこそ、男は鍛冶師に何度も頭を下げた。売ってくれるように懇願したのだ。

鍛冶師としても自分の作品が求められるのは嬉しい。一振り一振り、魂を削りながら作り出したものだ。評価されて、熱望されて嬉しくない筈がない。

何度も頼みに来る男を見て、これだけ熱心に頭を下げに来るのだから武器に振り回されることもないだろうと、自分を納得させた鍛冶師は男に武器を譲ることにした。

そのために鍛冶師はちよつとした依頼を男にしたのだ。

武器をただで譲る代わりに、あるドロップホアイテム材を取ってきて欲しいと。

男は大喜びで承諾した。まだ武器を手に入れた訳ではないのに鍛冶師に礼を言い。準備を万全にしてダンジョンへと潜っていった。

依頼された素材は特定のモンスターを十体も倒せば一回は手に入るようなものだ。それを数個持つて行けばよく、そのモンスターも別にレアモンスターという訳でもない。意気揚々とダンジョンに潜った男は順調にダンジョンを進んで行った——

——鍛冶師が依頼してから幾日か経ち、未だに現れない男に鍛冶師は首を傾げていた。早ければ二日、遅くとも四日ほどで戻ってくると思っていた男が今になっても現れ

ないからだ。依頼した素材をドロップするモンスターはそこまで強力な個体ではなく、現れる階層も男のレベルなら余裕を持つて挑める場所だ。もしや何かトラブルに巻き込まれたか、浮かれたままダンジョンに潜つて足元を掬われて死んでしまったのか。

ダンジョンで死ぬのは自己責任とはいええ、自分の出した条件のせいで人死にが出たら目覚めが悪い。鍛冶師は、男のファミリアにコンタクトを取ることにした。最悪の状況も覚悟していたが、男のファミリアに聞くと、男は毎日ダンジョンに潜っていると云うではないか。これは途中で熱意が冷めたか、とも思ったが男は依頼された素材の名前を呟きながらダンジョンに向かうのだと男の仲間は話す。諦めたのではなかったのか。ならば何故と首を傾げていると、ちようど男がダンジョンから帰つてきていた。

男は鍛冶師に気が付くと、ふらふらとおぼつかない足取りで近寄つてきた。そして鍛冶師の元まで辿り着くと、いきなり膝から崩れ落ちた。どこか怪我でもしたのかと鍛冶師と男の仲間が心配する中で、男はぼそぼそと何事かを呟いていた。一体どうしたのかと男の呟きを拾ってみると、素材が出ないと言っていた。

毎日毎日毎日、何体も何体もモンスターを倒しても全く素材が出ない。そればかりか、通りがかつた冒険者がそのモンスターを倒せばあっさりとドロップする。倒し方の問題かと手を変え品を変え倒してもドロップしない。幸運のお守りなる怪しいものを買つてみてもダメ。挙句の果てに闇派閥イヴェイルスの残党による陰謀を疑いそうになったのだ

と男は言う。

話を聞き嘘だと笑い飛ばしたくなかったが、男の表情からは悲壮感が滲み出ており、武器を求めたときの熱意からもとても嘘をつくようには思えなかった。だとすれば理由は何なのかと考えていた時に神が現れた。これ幸いと事情を話し、何か解決の糸口でもと期待すると、その神は神妙な顔つきで語った。

曰く、『求めるほど遠く、諦めるには惜しく、焦がれるほどにその手から滑り落ちる――汝、欲さば我欲を捨てよ。物欲センサーマジ半端ないわー』だそうだ。

深い言葉だった。

物欲せんさーなるものは時に、神ですら逃れられない絶対の法則であり、それに憑りつかれた者は男のような状態になるらしい。

神すらも縛る法則と聞き、鍛冶師達は息を飲んだ。それでも諦められない男は、ならば無心で倒せばドロップするのかと神に問うた。それに対して神はピタリと男に指を突き付け言った。

無心で倒すと言っているのに、ドロップを求め欲しているだろうと。

ハツとなった男は顔を伏せてしまった。鍛冶師も男の仲間も男に掛けられる言葉がなかった。

その後、金で武器を売ろうと言う鍛冶師に、男は条件を満たせなかったのだからと首

を振り、礼を言つて別れた。

数日後。

求めていた物とは違ふが武器を新調し、連日のダンジョン通いのおかげで上がったステータスと共に、男は憑き物が落ちたような顔で冒険に出かけた。体の調子も良く、探索は順調に進んで行つた。

そして、依頼の時に親の仇のように狩りまくっていたモンスターに偶然出会つた。ああ以前は躍起になつて狩つていたなと思ひながら、モンスターを倒す。ドロップした。男はびしりと固まつた。二匹目がどこからか現れ、それを倒す。ドロップした。三、四と倒す。倒す。ドロップした。ドロップした。ドロップした……

男は大量に散らばるドロップアイテムの中心で慟哭する。
物欲せんさーのバカヤローと。

この話は強欲は身を滅ぼす教訓として、冒険者たちの間で広まつていった——



（カドモスから何か素材がドロップしないかと見てたら、ドロップどころかカドモスが立ち上がりやがった。これが物欲せんさーか？ ……いやいや流石に違うだろ。確かに魔剣を買いたいからドロップしないか、しろよと思つてたが偶然だ偶然）

状況は違うが、これは以前自身のファミリアであった物欲せんさー事件のように、自分のせいなのかとベートは思った。流石にそんなことはないだろうと頭の中で否定するが、フィンが一度、戦闘態勢を解いていたことが余計に不安を煽る。用心深く慎重なフィンは仕留めた感覚があつたからこそ、戦闘態勢を解いたはずなのに、立ち上がり戦闘を再開するカドモス。原因は怪物の本能か肉体のポテンシャルか、それ以上の何かか……

答えの出ない考えを誤魔化すように、ベートはカドモスへと斬撃を叩き込む。踏み込みと共に放たれた剣閃はカドモスの肉を引き裂いたが、それに構うことなくカドモスは暴れ回る。チツと短い舌打ちと共に、ベートはカドモスの攻撃を避けた。

フィンの鋭い一撃も、ガレスの重い一撃も、ラウルの堅実な一撃も、ベートの素早い一撃も一顧だにせず執拗に攻撃を繰り返す。痛みや傷に全く反応していない。

（あーあ、最悪だ）

ベートは面倒だなと素直に思った。

痛みとは本来、命の危機を感じ取る為に必要な機能である。痛みが大きければ大きいほど、体は死の危機に瀕している。だからこそ生物は痛みを忌避し、それを避けようとする。が、カドモスは傷を受けようが痛みを受けようが、回避も防御もせずに攻撃のみを続けている。戦闘初期に攻撃を受けて怒りを募らせていた時とは大違いだ。

死に瀕したモンスターはなりふり構わず殺しに来る。折れた腕で殴りかかる。砕けた額をぶつけてくる。死んだ仲間の死体を振り回すなど、常軌を逸した行動を取ることがあるのだ。それが本能なのか存在意義からなのかは分からないが、厄介であることに変わりない。暴れ回るといふことは隙が増えると同時に、こちらも事故死の可能性が上がるのだ。ただでさえ一撃の重さが馬鹿げている——以前、第一級冒険者のテイオナを一撃でボロボロにした——カドモスが暴れる。その危険性は計り知れない。

モンスターと戦うときは勝つことはせず、速やかに殺すのが正しい。中堅処の冒険者が遊び半分でモンスターを黜り、予想だにしない反撃を受け瀕死のモンスターに殺されることなど、ダンジョンでは珍しい話ではない。

ダンジョン深層へと潜るロキ・ファミリアの面々はそのことを良く理解している。だからこそ、カドモスが立ち上がった時に警戒を強めたのだ。出来ればフィンの一撃で仕留めていたかったというのが本音であるが、たらればを言っても仕方ないと割り切り、

より一層慎重に戦闘しているのが現状だ。

カドモスの状態から見て、一度退避し放っておいても恐らく衰弱し、死ぬだろう。確実性を求めるなら当然、そうした方がいい。しかし、この場でカドモスと戦っているのは冒険者依頼をこなすためだ。本来なら受けたくなかったが依頼だが、派閥の関係上受けざるを得なかった。依頼のせいで出る時間的ロスを減らすため、少数精鋭かつ二班に分かれて行動している今、放っておけば死ぬと分かっているにもかかわらず、少時になるかは分からないカドモスの死を待つことは出来ない。そのために多少のリスクには目を瞑り、攻撃の手を緩めずに瀕死のカドモスを責め立てている。

時間的制約、攻撃に曝される危険性、瀕死の癖に激しく暴れるカドモス、足元を見られ受けた依頼など全部が全部、面倒だった。

暴れ回るカドモスが無防備な横腹を見せた隙にガレスが接近し、大斧を振り下ろした。ゾブリと肉を断ち切りながら大斧が埋まる。確かな手応え。全員がこのまま押し切ろうとし――

「これはッー！」

荒れ回るカドモスがガレスの大斧を身に受けた瞬間、カドモスは筋肉を締め上げて大斧を掴んだ。

驚愕により生じた一瞬の隙。武器を手放し離脱する間もなく、全力で突進したカドモ

スと壁の間にガレスは押し潰された。一度二度三度と轟音と共に、突き刺さったままの大斧が押し込まれ傷を広げても。自身の皮が抉れ肉が拉げても。カドモスは突進を繰り返した。

やがて動きを止めたカドモスが体を引くと、半ば瓦礫に埋まるようになっていたガレスが見えた。カドモスの血と肉、ガレス自身の血が混ざり合う光景は、なりふり構わぬカドモスの行動も相まって最悪の事態を想像させる。

「おおおおおおおおお!!」

青ざめたラウルが震える唇から声を出す前に、目を見開いたガレスが自身に乗っている瓦礫を弾き飛ばしながら壁から抜け出し、カドモスにお返しとばかりに拳を蹴りを突進を叩き込む。拳が肉を突き破り、蹴りがカドモスの巨軀を少しとはいえ浮かし、続く体当たりで吹き飛ばした。

カドモスが素手で吹き飛ばされるといふ目を疑う光景に、ラウルは先ほどとは違う理由で顔を青くする。ついでに、カドモスの突進を食らってもぴんぴんして、尚且つ吹き飛ばすガレスと、鍛錬とはいえ殴り合うこともあるベートもげんなりとしていた。改めて思うが、何でこんなバカげた耐久性を持つ男と殴り合わなければならぬんだ。

「がはは、カドモスもやってくれるわい。今のはちと堪えたぞ」

「ほら回復薬だ。全く、あまりひやひやさせないでくれ」

「……身近な人の方がダンジョンよりよっぽど摩訶不思議なんすけど。何食べたらそんなに頑丈になるんすか」

「……（そこは生き物としてこう、ぐったりしておけよ。何で寧ろ元気いっぱいなんだよ）」

一旦距離が離れたために、追撃をせずガレスの状態の確認のためにフィン達は集まった。浅くない傷を負っているが、致命傷には程遠いガレスの頑丈さにフィンはため息を吐き、ラウルは戦慄し、無事なのはいいがいまいち納得がいかず、ベートは心の中で文句を言っていた。

地面を削り傷痕を残しながらもカドモスはまだ立ち上がる。濁り切り溶け落ちそうな瞳は敵を見据え、到る所から血を流しつつも戦おうとするその姿には言い知れぬ迫力があつた。

——傷モ痛ミモ関係ナク

モハヤ幾バクモ無ク、朽チ果テルコノ身ガ求メルモノハ、死デアル

激情ガ、憎悪ガ、怨嗟ガ、屈辱ガ、倒レ伏スバカリノ体^{カラダ}軀ヲ満タシ、突キ動カスノダ

死ネバイイ殺シタイ殺シタイ何故生キテイル死ネ、死ネッ！ シネ！！

——我が命ハ只管ニ敵手ヲ殺スタメニ

「ガあ■■■■!!!」

咆哮、咆哮。尾を岩に叩き付け吹き飛ばし、足が地面を砕く。瀕死とはいえ未だ健在だと知らしめる行動。

フィンはそれを見つめ、一度目を瞑り——開いた。

「これ以上、時間を掛けるわけにはいかないな。ガレス」

「おお」

カドモスを吹き飛ばした時に回収した大斧を持ち、ガレスはニヤリと笑う。

「ベート」

「ああ」

首をコキリと鳴らし、ベートは応える。

「ラウル」

「はい」

呼吸を整え、ラウルは構える。

「——終わらせるよ」

瞬間、カドモスとフィン達は何度目かの、そして最後の衝突を果たした。

——カドモスの牙が迫る。

噛みつかれば全身をズタズタにされ原型すら残らないだろう。それを涼しげな顔でフィンはクルリと回るように避け、ついではかりに手に持つ槍でカドモスの口内を切り裂いた。外殻がいくら硬くとも、内部は外ほどの強度はない。鋭い一閃は血が付着する間もなく振りぬかれる。

口内に入る痛みに構わず、カドモスは自身の右側に抜けたフィンを意識を向けようとすれば、その死角に滑り込むようにベートが現れる。腰だめにした双剣の片方を勢いよく繰り出す。硬質な感触を残しながら左前脚に剣が減り込む。すぐさま減り込んだ左手の剣を引き抜き、その勢いを殺さず出された右手の剣が傷口を更に抉り鮮血が噴き出す。表皮を超えて神経まで剣が突き刺さった。

(相変わらず硬つてえ、な！)

ただ繰り出すだけなら効果が薄く、硬質な外殻や鱗に阻まれて有効打にはならない。ならば徹とらる威力になるまで力を溜めればいい。一瞬の溜め。しかし、瀕死ながらも驚異的な反応を見せるカドモス相手には、その隙すらも死に繋がる。だからこそ、フィンが作り出した死角に入り込むことでその隙を無くしたのだ。刺さった剣を捻りながら抜くことで傷口を広げたベートがその場から飛びのくと同時に、カドモスが足を叩きつけた。

地面が爆ぜ、礫が飛び散る。

目標をフィンからベートに移したカドモスが地面に亀裂を作りながら猛進する。雄たけびと共に驚異的な速度でベートに迫るカドモスはしかし、ベートに追いつけない。力だけなら階層主であるウダイオスよりも上と言われているカドモスを、速さという点でベートは圧倒していた。

「行けッ!!」

自身の出来る最良を考えてラウルが放った矢が、ベートの付けた傷痕を更に抉る。痛みを無視していても体にはダメージが蓄積する。確実にカドモスの動きは鈍っていた。

追われているベートはある程度進むと反転し急停止、地面を削り反動を殺さず膝に溜める。停止に伴う脚への負荷を、鍛え上げた柔軟な筋肉と高いステータスで強引に抑え込む。ギチギチと凝縮された筋肉が唸りを上げ、解放の瞬間を待つ。

そしてベートが声を漏らし、一步を踏み出す。

「——ツオオ！」

——爆砕。

踏み出した脚が地を抉り、轟音と共に小規模なクレーターが生み出された。

ベートの姿が掻き消える。

伝わる力が余すことなく速度に変わり、一瞬にして加速する。

【双狼追駆】

ベートの保持するスキルの一つで、加速時における力と敏捷のアビリティ強化の恩恵を齎す。これにより一気に加速し、ベートは一時的に本来のステータスすら超越した速度に至るのだ。

ラウルはベートの踏み込みの度に起こる破裂音と、噛み砕かれたような地面の傷痕によつてのみベートの行方を知る。とてもじゃないがサポートなんて出来ない。悔しさに身を焦がされながらも、戦局から目を逸らさない。

追われていた時以上の速度でベートはカドモスに向かう。高速で動く両者によつて、彼我の距離は瞬く間にゼロになる。今度こそ獲物を逃がさぬよう、カドモスは全身を思い直接ぶつかりに行く。巨駆と重量、速度と硬度によつて技も何もない筈のその体当たりは城砦を破壊する砲弾の如く、冒険者の体を粉々にするだろう。

大きくて速い、だから強い。

子供の理屈を突き詰めたような、ある意味真理とも言える光景。

「ゼエアアアアアア!!」

「——
■ ツ
!?!?!」

だからこそベートがその攻撃を打ち破るのは当然であった。

突進してくるカドモスとぶつかる直前に、ベートは左足を軸にして放った回し蹴り。全速力に加え回転により生まれる遠心力が加算された蹴撃がカドモスの鼻先からやや横にずらした位置に叩き込まれた。叩き込んだ蹴撃が肉を潰す感触と同時に、軸にした足が地面に減り込み悲鳴を上げる。それでも吹き飛ばされることなく、ベートは脚を振り切った。

(あああ脚痛つたい!?)

……ある程度は予想していたが、その予想を超えた負荷にベートは悶絶していた。軽く埋まった足を引き抜きカドモスの行方を見る。

直進していたカドモスは側面を叩かれた為に向きをずらされ大きく斜めに滑っている。動いている物体は側面からの力に弱い。けれど、本来ならばカドモスは耐えられただろう。しかし、事前にベートに刻まれ、ラウルに挟られた左足の傷によって、速度の乗った自らの重さを支え、踏みとどまる事が出来なかった。

大きくて速い? そんなことは俺たちの方が知っている。地力で負けているなら技と知恵で打ち勝つのが冒険者だ。モンスター貴様らの道理だけが全てじゃない。モンスターをこそ殺すために磨いてきた技術、蓄積した知識だ。今更そんな分かり易い理屈に負けてたまるか。

「ガレスっ!!」

フィンの指示が飛ぶ。

太く短い脚が大地を踏みしめ、丸太のように太い腕の筋肉が隆起する。肩に担いだ大斧を両手で構え、ドワーフの戦士は笑みを浮かべる。

カドモスの誘導と隙を作り出すという目立たずとも重要な仕事をこなしたフィン。知恵と技で万全の状態ですらに繋げたベート。自身の出来ることを考え、実行したラウル。

フィンが起点となりベートが作り出し、ラウルが期待し見つめる自分の為に整えられたこの好機^{舞台}。

ここで奮い立たなくていつ猛るのだッ!

眼前に迫るのは自らの意志ではなく慣性に従って滑るだけの^{カドモス}的。

少々自分には物足りない相手だが、まあ良い。

「おおおおおおおおお!!!」

——大斬撃。

裂帛の気合いと共に振るわれた一撃が、カドモスの首を切り落とした。

クルクルと空を飛ぶカドモスの頭が、ぐしゃりと地面に落ちた。頭部を失った胴体は地面を滑り、やがて力なく止まる。

『……………』

フィン達は警戒を解かず、少しの間カドモスを注視していたが、動く気配はない。ラウル視線がそわそわとフィン達の顔とカドモスの亡骸を往復する。フツと笑いを漏らしたフィンが頷いた。

「ツしやああああああ!! 勝ったああ!!」

拳を突き上げ、ラウルが叫んだ。

全身を使つて喜びを顕わにするラウルの姿に、フィンとガレスは楽し気に笑う。自分とは違い、いつそ大げさなまでに感情を発するラウルは、率いる形とは違うが、共に歩もうと思える人柄をしている。だからこそ、彼は次代の中心核なのだ。当分譲る気はないけど、内心で独りごちてからフィンは手を叩いた。

乾いた音が響き、ラウルがフィンの方に向き直る。

「喜ぶのはいいけど、目的は忘れてないだろうね? ラウル」

「もちろんっす! カドモスの泉の泉水を回収ですよね」

ラウルはよっ、ほっ、と声を出しながら背負ったサポーターバックを降ろさず体を捻り、容器を取り出そうとするが、中々取れない。その姿に、やや呆れた視線をフィン達を送っていると、カドモスの亡骸から魔石を引き抜いてきたベートが近づき、ラウルごとバックを強引に引き下げるように引っ張った。

粗野な、ややもすれば乱雑とも言えるベートのらしくない行動。疑問の声を上げる前に——それは来た。

びちやりと粘着質な音を立て、ベートの背と腕、サポーターバッグとラウルの腕に大理石模様の液が付着した。

急な感触にポカンとしていたラウルの表情が一瞬で激変する。

「——あ」

「——ああああああああああああああっ?!」

臓腑の底から引きずり出されたかのような悲鳴。ラウルは普段の言動からは想像しにくい、Lv. 4 のオラリオでも上から数えた方が早い実力者だ。当然、そのレベルに至るだけの修羅場を潜ってきている。痛みにはある程度の耐性が在るはずだった。

それが攻撃してきた何かに警戒することも出来ず、絶叫し痛みへのたうち回っている。

カドモスが占領していた場所に繋がる通路の影からゾロゾロと現れたモンスターは、芋虫のような姿だった。

全身を占める色は黄緑。ぶくぶくと膨れ上がった柔らかそうな緑の表皮には、ところどころ濃密な極彩色が刻まれており異様に毒々しい。無数の短い多脚からなる下半身は芋虫の形状に似ている。長い下半身に乘る格好の上半身は小山のように盛り上がっ

ており、厚みのない扁平状の器官——恐らくは腕——が左右から伸びていた。先端には四本の切れ目が入っており指に見えなくもない。

初めて見るモンスターに警戒しつつも、ガレスに素早く迎撃の指示を出す。素早く走り寄り、ラウルの怪我を見ると傷口が溶けていた。いや、溶け続けていた。呻くラウルから一旦視線を離し、ベートを見る。

想像以上に酷い怪我を負っていた。強力な溶解性の液体、腐食液とでも言うべきか。その直撃を受けたベートの背は溶け焼け爛れている。元の肌の色が判らぬ程に変色し未だにジユウジユウと音を立てる背。着ていたジャケットは脱ぎ捨てたのか、近くで元の形が分からない位にグズグズに溶けている。咄嗟の判断としては最上の部類であるだろう。そのまま着ていれば、服を伝い腕にまで腐食液に晒されていたかもしれない。

ベートは痛みから暴れるラウルからサポーターバックを取り上げ放り投げる。バックは使い物にならず、中に収められていたアイテムや武器すらも溶けていた。モンスターと戦っていたガレスが焦燥を滲ませながら戻ってきた。

「フィン!! まずいぞ、こやつらの体液は武器を溶かすッ! 予備の武器をくれ!」

「駄目だ、アイテムも含めて全損した！ ラウルを背負ってくれッ退却する!!」

迎撃が難しいと判断するや否や、フィンは躊躇なく退避を選択した。ラウルを担ぎ、ガレスが走り出すと先導するためにフィンが先頭を駆ける。

もはやクエストどころではない。ダンジョンでは何が起こるか分からないが。これはと、口について出そうになる言葉を、奥歯を噛み締め抑えこむ。今はそれどころではない。ラウルも心配だが、それ以上にベートが気がかりだ。傷の度合いで言えばはるかに大きな怪我を負っているながら、いくらか噛み殺したような呻り声を出さだけで反応が薄い。だがその顔色が酷く悪い。二人とも一刻も早く治療の必要がある。

入り込んだ通路を削りながらも追って来る芋虫のようなモンスターを確認し、フィンはキャンピングを指しひた走る。

「……………」

薄い表情に汗を滲ませながら走る狼人は思う。

（——痛がるタイミングを逃した!）

終戦の三

「アイズ、あのモンスターを討て」

一人でだ、と小人族バルウムの少年は彼女の顔を見上げながら言った。

「待ってください、团长!」

その言葉を聞いて、誰よりも早く、レフイーヤが悲鳴を上げるように叫ぶ。ティオナ達も—すぐに詰め寄ろうとするが—爆撃。先ほど殲滅した芋虫型のモンスターが進化したような上半身が人型で階層主クラスの規格外の大きさを持つモンスターによる攻撃。線の細さからどこか女性を思わせるモンスターが動いた。

扁平状の腕を広げ、そして蠢くように多脚を動かし進行を開始した。

「……時間が無い。ラウル、リヴェリア達に撤退の合図を出せ!」

「ねえ、ちよつと、フィン!? 何でアイズ一人だけなの!? あたしもいくよ!」

「团长、私からもお願いします。ご再考を」

吹き飛ばされかけてもなお、しつこく食い下がろうとしたティオナ達に、フィンが团长としての言葉命令を発しようとして——

ドンツ、と空気を震わせる音と共に閃光が打ち上げられる。全員が音の発生源に目を

向けると、使い切りの信号弾を捨てるベートの姿があった。ベートは視線が自分に集まっていることに気付くと怪訝そうな顔をした。

「……撤退だろ？ 早く動くぞ」

「ベートは良いの！ アイズ一人を残すなんて、心配じゃないの!?!」

「そ、そうですッ、せめて援護だけでも」

「いらねエよ」

噛みつかんばかりに言い募ろうとしてくるテイオナとレフィーヤの言葉を、ベートはピシヤリと切り捨てた。

冷たく感じる声音に、ビクツと肩を震わせたレフィーヤ。その姿を一瞥し、ベートは手早く物資を纏める。

「別にレフィーヤだからって訳じゃねエ。ラウル^{L.v.4}だろうがテイオネ^{L.v.5}だろうが、リヴェリア^{L.v.6}だったとしても、団長の指示は変わらなかつただろうよ」

モンスターの腐食液を浴びたせいでエリクサー^薬によって傷は癒えていても、服を羽織る暇がなかつたため、未だ晒されたままの上半身に物資を背負うベート。

「それと、レフィーヤはともかくヒリユテ^前姉妹は分かつてんだろ。無駄な時間を使わせるなよ」

「な——」

あまりにも厳しい言い方に、レフイーヤは立場を忘れてカツと頭に血を登らせる。ふざけないで下さい、と感情のまま口をつけて出ようとした声は、苛立ちを滲ませるべトの声によって止められ、舌先で解れて消えた。

「——ロキ・ファミアアでダンジョンにいるんだ。理解してて納得してない程度で判断を間違えるんじゃないよ」

——殺したいのか

怜悯な声が、一切の反論を封じ込める。

「……ッ、分かっているわよ。悪かったわ、手間かけたわね」

「うん、ごめん、ベート。わがままだった」

怒鳴りそうになる自分を抑え込んで、テイオネは詫び、意気消沈したテイオナも謝った。これ以上の反論は派閥の幹部として、してはいけないラインだった。個ではなく群として動いている中で、上の者が独断を許されるのは、それに見合うだけの能力、実績、強さを持っていて、その判断が群に利益を与える場合だ。

そして今回はその条件を満たさない。ならば、トップの言葉に従うべきだ。

「わ、私は、残ります。——残らせてくださいッ!!」

目を瞑り、魔法杖をギュツと握り締めながらレフイーヤは声を上げた。

「ちよ、レフイーヤ!?!」

「お願いしますッ、離れた位置からの援護だけでもいいんです、少しでも力になりたいんです。お願いしますっ——お願いします!!」

敵が迫る中、本来ならここで我儘を言っているレフィーヤを怒鳴りつけるか、張り倒してでも速やかに後退すべきだ。

だが——

「離れた位置から援護だけ、ね。レフィーヤ、君にはそれがやれると?」

「はい、やります。やらせてください団長!!」

つ、と細められたフィンンの眼差しがレフィーヤを射抜く。レフィーヤはその視線に怯むことなく肯定した。

「アイズ」

「うん、大丈夫だよ、フィン」

「……そうか。なら許可しよう」

「だ、団長!? なら私も」

「ただしッ! ——残るのはレフィーヤだけだ。他の誰も護衛には付けない」

「な、無茶だよ!!? レフィーヤを一人で残すって」

「それでも残るか? レフィーヤ」

フィンは傍で抗議を繰り返す姉妹に目もくれず、レフィーヤへと問かける。

「はい、やります。私もロキ・ファミアリアの一員なんです、やってみせます!!」
「却下だ」

熱を灯した瞳で力強く言い切ったレフィーヤの頭部が叩かれた。ぐわんと視界が揺れて、不意を突かれたレフィーヤはあっさりと意識を飛ばした。

崩れ落ちるレフィーヤを、わわと慌ててテイオナが抱き留める。

「ベートお」

「時間がない」

「そうだけどさー」

「えっと、どういう……?」

ラウルが首を傾げながら疑問の声を漏らす。それは移動しながらだ、とフィンはアイズを残し後退を始める。

「遠征は終いだ。早く終わらせて帰るぞ」

「うん、ごめんなさい」

「それはリヴェリアにでも言いな」

嘆息と共にベートはフィン達に続いて後退して行った。

愛剣を構え新種のモンスターに向き合う。この程度の敵に手古摺ってはいられない。

い。もつともつと強くなるために。

「行くよ」

風と共に、劍姫は飛ぶ。己が宿願を果たす為、より高みに上る為に。



リヴェリア達待機組と合流したフィン達は全体の被害を確認しつつ、高レベル冒険者の優れた視力で、一人戦闘を続けるアイズを見守っていた。

「ベート」

団員たちがアイズの奮闘を見守る中、黙々と武器の整備をするベートの横に立ったりヴェリアが、視線はアイズへと向けたまま声をかけた。

「すまないな。損な役目をさせてしまった」

「……ああ、さっきの事か」

「ああ。フィンから聞いたが、あれはお前の判断が正しい。今あのモンスターの戦い方を見れば、レフィーヤも理解するだろうが……」

口と頭部の管から放たれる腐食液、アイズの攻撃に追隨する反応速度、爆発する粒子。どれを取っても距離を離れた程度では対策にならない。未だ並行詠唱を習得できていないレフィーヤでは、足手まといにしかならなかっただろう。

「それじゃ遅い」

「そうだ。窮地に陥ってから対策を考えるようでは遅い。どうもレフイーヤは、ことアイズが関わるとなると、無茶をしようとする」

「――ハ」

ため息のような声が、ベートの口から洩れる。モンスターに弾き飛ばされたアイズの姿に、周りの団員達が声を上げる中で、その声は近くに居るリヴェリアだけに届いた。

「……何か言いたげだな」

「いや——先は長そうだな、副団長」

ベートは苦い表情をしたリヴェリアに目を向けずに、淡々と身支度を整えていく。

「ただ砲台になって魔法をぶっ放せばいいって訳じゃない。全体を見て判断を下せない
と話にならねエ」

「随分評価が厳しいな」

「オラリオ最強の魔導士の後継なんだ、求められる能力が高いのも仕方ないだろ。それ
に、副団長^{リヴェリア}ほどじゃねえよ」

ワッ!! と歓声が上がる。周りの団員達が拳を突き上げ勝利を祝っていた。大型モンスターがアイズに打ち取られたのだ。一通り準備の整ったベートが立ち上がる。

「行かねえのか?」

「……そうだな。私はアイズの様子を見に行ってくる。ベートもあまり無理をするな」
リヴェリアは念を押すようにベートに一声かけると、戻って来たもう一人の問題児へと歩み寄っていく。

今回の遠征はここまでだ。

新種のモンスターの事や、自分を含め、全体の課題や問題点も色々浮き彫りになった。新階層へと挑戦出来なかったこと、受けた被害を考えれば厳しい結果になったと言わざるを得ないが、今回の件で浮ついていた気持ちも引き締められるだろう。未踏破階層だけでなく、ダンジョンとはどのような場所においても死の危険があること。それを未踏破階層へと向かう前に再認識出来たのはファミリアとしてプラスになった。

地上に戻るまでは油断出来ないが、大規模なイレギュラーと言うべきこの事態を死者無く乗り切れたのは大きい。ここで死者が出てしまえば、次回の遠征に暗い影を落とすことになっていただろう。

——ベートは出会った当初よりも強くなった。判断力も知識も技量も、何もかも比べものにはならない。

——だが、それでも。その眼だけは、その瞳の奥にある感情だけは……

歩を進めていたリヴェリアの視界に、おずおずと近付いてくるエルフの姿が入ってくる。

「リヴェリア様」

「レフィーヤ、目が覚めたのか」

「……はい。あの、私」

「頭は冷えたか？」

「あ……」

「確信も根拠も無く、フィン^ズの指示に従わず行動しようとした。その上一人という条件を付けられてもなお、意見を翻さなかった。自分で無茶だと思わなかったか？」

レフィーヤは目を伏せ、魔法杖を持つ手も微かに震えている。

「お前があの子^ズの力になりたいと思っっているのは知っている。その為の努力をしていることもだ。だからといって、無茶をしようとするのが正当化される訳ではない」

「は、い」

「歯痒くても、堪えなければいけないことは多い。レフィーヤ、お前はまだまだ弱い。それを自覚しろ」

リヴェリアの厳しい言葉が、レフィーヤの心に突き刺さる。どれも正しく、自覚して

いる……いや、自覚しているつもりだったことだからだ。

——私は弱い／でも役に立てるかもしれない

——私は足を引つ張つてばかりだ／でも皆が褒めてくれる魔法がある

言葉の裏にある期待、それはこうであつて欲しいという希望的観測で、誰でも持ちうる自分はあるんだという考えだ。その考え方自体は恥すべき物では無いが、他人に指摘されなければ顧みないものでもある。分かつていると思つていることを他人に言われると羞恥心が湧くものだ。

尊敬しているリヴェリアにそういった心持ちを見抜かれたという思いもあり、余計にレフィーヤは落ち込んでいた。

「……は、い」

「二足飛びに強くなることは出来ない。もどかしく思つても、一歩ずつ着実に経験を積み重ねる事が大事だ。他人と比べるのではなく、自分のペースで強くなつていけ。無理をして足を踏み外せば、それは自分の身だけではなく、仲間の命にも関わるかもしれない。そんな事はお前も望んでいないだろう？」

ギユツと握りしめた手が白くなつている。己の足りなさ、先走つた事に対する羞恥がレフィーヤを苛んでいた。

「だが、今回は一概にレフィーヤだけが悪いわけじゃない」

え、と声を漏らしながらレフイーヤが顔をあげた。リヴェリアの横顔には、手の掛かる子供を見るような表情が浮かんでいた。

「レフイーヤが一度やれると言ったとき、フィンはアイズに確認したのだろうか？　そこで断らなかつたのだから、非はアイズにもある」

「そんな、アイズさんは！」

「事実だ。大方、自分が何とかすれば問題ないと考えていたのだろうか……まったく、相変わらずアイズはレフイーヤ達に甘いな」

「アイズさんが？」

「ああ。ティオネとティオナ、それにレフイーヤには大分甘い。それだけ心を許してるのだろう」

先ほどまで青かつた表情にポツと朱が色付いた。現金なものだと、リヴェリアは内心で思う。

「だからこそ、レフイーヤ。これからもあの子^{アイズ}を支えて、力になってやってくれ。強さを求めて、無茶をして足を踏み外すことが無いように」

「——ッ、はい!!　ありがとうございます！」

先程とは打って変わって、満面の笑みを浮かべたレフイーヤは、リヴェリアにお辞儀をするとアイズの元に走っていった。

「お主も充分にレフィーヤに甘いと思うが？」

「ガレス……盗み聞きとは趣味が悪いぞ」

「気を遣って待っていてやったというのに、随分な言い草じやな」

先程までレフィーヤを見ていた時と打って変わり、責めるような目つきで戦斧を担いだガレスを見やる。その様子にフンと鼻を鳴らして、ガレスは悪びれた様子も無く話を続ける。

「それで？ わざわざそんな事を言いに来たのではないだろう。要件はなんだ」

「当たり前じゃ。——前衛は死者こそ居ないが、盾や防具をかなりの数をやられておる。防壁タンクとしての機能が落ちるのは確実じゃな。後衛ウシゴに負担ウシゴが掛かることになるが、どうだい？」

連れ立って歩きながら後の問題点を突き詰めていく。異常事態イレギュラーを乗り越えたからこそ、その直後や帰還までには殊更に慎重にならなければならぬ。

「そうか……後でフィンも交えて話すが、後衛組私達としてはアイズ、テイオネ、フィンはこちらに欲しい。ラウルには悪いが、中衛の統率は任せる形が望ましい」

「下層まではフィンが中衛に控えなければ難しいと思うがのう……」

「テイオナを遊撃ではなく、完全に前衛に組み込んだらどうだい？」

「ベート一人に遊撃をさせるつもりか？ 流石に無理があるじやろう」

「そうだな——」

周りをそれとなく見回しながら、小声で会話する。隠すような事でも無いが、今は怪我の治療と陣の立て直しを優先すべきだ。余計な情報で不安にさせる必要もない。

「ところで、何故高等回復薬（せんなも）を持ち歩いているんだ。負傷したなら、早く使えば良いだろう」

「む？ ああこれか。儂が怪我をした訳ではない。返す、だそうだ」

「返す？」

「五十層（ごじゅう）に来るまでに貰ったらしいの」

「ガレス、わざと誤魔化しているのか？」

一々会話を区切るガレスに対して、リヴェリアはその柳眉を顰める。冗談を好まない訳ではないが、まどろっこしい話し方をされて気分が良くなる筈もない。

「せっかちじやのう。もう少し情緒「ガレス」ああ分かった分かったわい」

流石に引つ張りすぎたかと思いつながら、ガレスは肩を竦めた。

「自分には今必要ではないからと言って、ベートの奴が渡してきた。全く、自分で渡せば良いものを」

「……」

「と、おい。何するんじゃ!」

ほっそりとした指を口元に添えたリヴェリアは、急に顔を顰めると、ガレスの手からハイ・ポーション高等回復薬をひったくるように取り上げ、足早に進んで行く。

「あ、リヴェリア様」

「ホントだ、どーしたの? そんなに——」

バシヤツと、ヒリユテ姉妹とレフィーヤに囲まれていたアイズに問答無用とばかりにハイ・ポーション高等回復薬がぶちまけられた。パチパチと何をされたか理解が追いつかないアイズは瞬きをする。

「まだ痛むか?」

「ううん、もう大丈夫……あ」

あ、と口をつけて出てきた言葉に気付いた時にはもう遅かった。恐る恐る、悪戯がばれた子供のようにアイズはリヴェリアの方を向いた。怒っている。とても怒っている。今までの経験からプルプルと体が震える。

リヴェリアが睨を吊り上げ口を開こうとした瞬間に、反射的にきゅつと目を閉じたが——想像していた声説教が来ない。疑問に思い、ちらつと見てみると、リヴェリアは大きくため息を吐いていた。

「フィンからの指示とはいえ、あまり無茶をするんじゃない。心配するだろう」

「…リヴェリア」

「それに物資を大きく失ったとはいえ、お前一人分程度の回復薬ならあるんだ。全体が疲弊している分、地上への帰還にはお前にも無理をさせることになるだろう。だからこそ、お前が万全な方が、結果として皆を助けることになるんだ」

さつきも似たようなことを言ったなと思いつながら、しかし言わずにはいられないのだ。上を見続けると足下が疎かになる。口うるさいと思われようと経^先験^達者として、伝えなければならぬことがある。知らなかつたせいで後悔しないように。

「うん」

「それと」

「？」

「二人でよくやってくれた、ありがとう。皆が助かった」

「——うんッ」

綻ぶようなアイズの笑顔。たまたまそれを目視した団員たちが膝から崩れ落ちた。

——ちよ、どうしたの！ まさかあのモンスター^の腐食液に遅効性の毒がッ!?

——幻覚系かッ？ 気持ち悪いにやけ面で倒れてるぞ！

一部で大騒ぎが起きていたが、そんなことは関係ないところらでも騒ぎだした。

「アイズ、どっか怪我してたの!？」

「アンタ、そうならそうと早く言いなさいよ！」

「わわ私エリクサー貰ってきます?!」

「待って、レフィーヤ、もう大丈夫だから——」

あーだこーだと言いつつ合いながら移動していく姦しい集団を見送る。あの分なら大丈夫だろう。

「魔法、か」

「ああ。あの子のあれは強力な反面、出力を上げると反動も大きい」

「エアリエルを纏ったことのない儂らには分からんことじゃな」

「全力ではないが、フロスヴェルトを介して、疑似的に使ったことのあるベートだからこそだろう。強くなるにつれ、痛みを隠すことが上手くなってしまったアイズの事だ。言われなければ地上に戻るまで誰にも気づかれず、黙っていただろう」

よく見ている、というべきか。そこまで気を回せるなら自身のことも気遣えと怒るべきなのか。

「まったく、困ったものだ」

「過保護が過ぎると鬱陶しがられるぞ。まだまだとは言え、あやつらも一級冒険者じゃ。自分のことは自分で何とかするわい」

「お前は放任が過ぎるんだ。お互いが切磋琢磨するのはいいが、誰かが歯止めをかけな

ければ、競争心は焦燥に変わり、無茶をすることになる」

「教育方針の対立かい？ 保護者は大変だねえ」

「フィン、茶化すんじゃない。被害状況はまとめられたのか」

「ああ。君達がじゃれ合っている間に健気な団長はしっかりと働かせて頂いたよ」

両手を軽く広げ、やれやれといった声が聞こえそうな仕草とともにフィンが被害状況をまとめた紙を渡してくる。視線で撫でるように紙を見た後、リヴェリアはそれをガレスに手渡す。

「やはり、武器防具の損耗が激しいな」

「そうだね。クエスト組は撤退出来たけど、キャンプ側は防衛戦だった事もあって大分消耗してる。けど物品の損耗に比べて人員の負傷は少ない。前衛が踏みとどまってくれたのと、腐食液を受けた物の破棄の判断が早かったためだ。リヴェリアの現場の指示のおかげかな？」

「いや、私が指示を出す前に前衛がよく耐えていた。陣営を立て直す間を作ってくれたから、ここまで被害を抑えられた。よく鍛えられている」

「指示があつたとはいえ、しっかりと仕事を熟したということじゃな。あやつらには本拠ホームに戻ったら一杯奢ってやるか」

口論、とまでは行かないがお互いにやや棘のある会話になっていた自覚のあるリヴェ

リアとガレスを、フィンが適度な落としお互いの功績所を持つて話を落ち着けた。そつなくそれをやつてのけた団長は、そのまま報告と帰還までの方針について話を続けた。

「〜と、これくらいかな。後はその場の判断に任せるよ」

「ああ。あまり事細かに決めるよりもそちらの方が動きやすい」

「何事も無く終われば良いが、そうもいかんだろう。何せここは迷宮ダンジョンじゃからな」

程なくして、ロキ・ファミリアは帰還を始める。まだまだ暴れ足りないと言う者、今回も生き残れたと安堵する者、自身の課題を見つけ克服を目指す者とそれぞれが様々な思いを抱きながら歩みを進める。

ガレスが零した不吉な予感的中するのは、帰還も間近な上層でのこと。片手間で片付けられるモンスターのせいで、最後の最後に要らぬ心労を掛けさせられる事になる。どこに居ても気が抜けない、侮れないのがダンジョンなのだと戒められた。

そこであつた出会いこそが、白い少年の眷族の物語の始まりであり、既に始まつていた金の少女の剣姫の神聖譚との交差点でもあつた。

しかし、ここで語られるのはそのどちらでもなく、一人の灰色の狼ウルフ・ヒストリア人が紡ぎ出す――喰い違う物語である。

終戦の三？

— 神はここにおわします

— 好奇に満ちて、我らを見守り、一欠片の奇跡恩恵をお恵み下さる

— 神はここにおわします

— 隣人として、友人として、愛する者として、親として

— 神はここにおわします

— 万能を封じ、零能となりて、我らと共に

— 神は地上ここに、おわします……



だああああああああ、と訳も分からぬまま声を上げればこうなるだろうという、見本のような絶叫を響かせながら、体の半分ほどをミノタウロスの血液で染めた人影が脱兎の如く駆けていく。

助けてもらったにも関わらず礼もないのはどうかと思うが、そもその原因はロキ・ファミリアの不手際であるし、悪態をついてくる輩も多い冒険者としてはまだマシな手合いでもある。見た限りいかにも駆け出しといった風貌だった。それがいきなりミノタウロスに襲われればああもなるかと納得もする。

匂いを探った感じからして、最後の一体だった個体を倒したようなので、これでやつとミノタウロスとの楽しくもない鬼ごっこは終わりというわけだ。

「戻って団長たちへの報告頼む。俺はこのまま上つてギルドに事のあらましを伝える」
「あ」

差し出して、しかし取られることのなかった手を見つめていたアイズの横を通り抜ける。

(さて、どういう感じで誤魔化すか)

コキリと首を鳴らし、雑多に現れるモンスターを、片手間どころか特に意識も向けずに殺しながら進む。

考えるのは管理機関への報告内容だ。人的被害——ミノタウロスに驚いて転倒位はあるかもしれないが——はなかったのだからそのまま言っても問題はないだろうが、突っつかれる弱みを素直に出す必要もない。こういうのは団長の十八番なんだが、と眩きながらベートは考えを纏めに掛かる。

こういう報告は余人の証言が入る前、とつとに済ませるに限る。この後、恐らくミノタウロスに追いかけられた下級冒険者がギルドに押し寄せるだろう。何であんな上層にミノタウロスが居るんだ、話が違うと。その時に原因を調べています、と言うのと事情を説明出来るのではその後の対応に大きな違いがある。

迅速に原因究明が出来る頼れるギルドと、原因はまだ分かりませんと答える普段偉そうなだけで役に立たないギルド。どちらが印象が良いかなんて比べるべくもない。

もし後者の意見が多数の状態になった場合、スケープゴートとしてロキ・ファミリアが槍玉に挙げられることになるだろう。ロキ・ファミリアがミノタウロスを駆除して回っていたのは多数の冒険者に見られている。そして、イレギュラーミノタウロスの集団逃走があつたとはいえ原因を作ったのは確かにこちらだ。弁解の余地はほとんどない。

逆にギルドがその意見を甘んじて受け、ギルドが当たり障りなく穏便に事を運んだ場合、ロキ・ファミリアがギルドに貸しを作ってしまう。そうなればギルドは喜々として色々と面倒を押し付けてくるだろう。

オラリオトップのファミリアをある程度自由に動かせるというのは、多少の汚名を被つたとしても十分なリターンがある。

まあ今回の件はそこまで大事にはならないだろうし、押し付けられるとしても、精々がダンジョンの掃除スワイーパー当番作業だろうから、気にする必要もないと言えませんが、遠征後

なだけに余計な問題を抱え込みたくないのも事実だ。

だから――

「では、17階層で興奮状態にあったミノタウロスの集団と遠征からの帰還途中に邂逅し、戦闘。最中に集団でミノタウロスが逃走、それを追跡しつつ駆逐していった、というところでよろしいですか？」

「ああ。事前に冒険者とやりあったのか、縄張り争いでもして興奮していたのかは知らねえがな」

「17階層から5階層まで最短ルートで上がってきた、と」

「頭の回る強化種がいた感じはなかったが、バラけながら上がられたせいで手間が掛かっちゃった」

強化種、という単語を聞いた瞬間にギルドの職員は顔を顰めた。当然だろう。過去現れた強化種のせいでギルドはかなりの被害を受けたのだから。恐らく居なかった、と言われても緊張しない方がおかしい。

「過去に同じような事例は？」

「いえ、逃げた冒険者を追って上層まで来たことや、はぐれのモンスターが迷い込むよう

に来る例はありますが、モンスターが先を走る形での例は、すぐに探れる範囲ではありません」

「……そうか。取りあえず分かる範囲でのバラけたミノタウロスと上つてきた奴らの逃走ルートはこれだけだ。必要なら後日、遠征の成果と今回の件を他の団員の話も纏めて報告書を出すか、問題ないか？」

「はい。すでに十分な資料ですが、出来れば頂きたいと思います」

「ああ。——もし、何か分かるようならロキ・ファミリアにも情報が欲しい。たまたまならそれでいいが、遠征帰りを狙った横やりなら相応の対応をしないとならねえ」

「——ッ、はい。分かりました。お疲れのところ申し訳ありませんでした」

ギルド職員が頭を下げたのを契機に、一声だけかけて受付を後にする。

はあ、というため息を口の中で転がしながら、壁に背を預け、ダンジョンの入り口を見る。ひそひそとこちらを見て何事か囁く声があるが、努めて無視する。獣人かつ一級冒険者の聴覚をもってすれば、この程度の距離で囁かれる言葉など、普通に話しているのと変わりはない。

注目されることには慣れている。オラリオトップのファミリア、その一級冒険者ともなれば目立つのは当たり前だからだ。

羨望、嫉妬、憧憬、嫌悪、好奇、畏敬、敵意、その他諸々。一々気にしていたらキリ

がない。

今回の件は取りあえず原因不明、他派閥の手出しならこちらで落とし前をつける——という感じに落ち着けた。

余計な火種を生みたくないギルドとしてはしつかりと調査して、こちらに教えてくれるだろう。協力的な姿勢は見せた。今回の遠征もギルドにせっつかれた面もある。これだけ材料があればまあ、大丈夫だろう。

遠征は相変わらず素直に終わらねえな、とベートは一人ごち、壁から背を離す。

「うお、ロキ・ファミアだ」

「遠征から戻って来たのか！」

ダンジョンに続く出入り口から現れた集団に、その場の人間は目を奪われる。ベートが来たときは気付かなかった者達も、何だ何だと騒ぎ出す。

にわかに活気づいた空気に辟易しながら、先頭を悠々と歩く団長の元にベートは歩み寄った。

「やあ、ベート。アイズから大まかに聞いているけど、手間をかけさせたね」

「問題ない。ギルドへの報告はある程度済んでる。後日遠征の報告と一緒に詳細を上げれば終いだ」

ロキ・ファミアの行進に加わり、小声でフィンに説明を済ますと「仕事が早くて助

かるよ」と軽い笑みと共にベートへ向けていた視線が切られる。

ベートもフィンンの横から隊列をずらし、後ろに控える。

この集団の頭はフィン・デームナだ。

遠征から戻り、オラリオに凱旋したならば、先頭を歩くことを許されるのは、彼ただ一人なのだから――

（――とところで、俺の罰はどうなったんだろうか？ 出来れば有耶無耶になってると良いんだが）



「おつつつかえりいいいいいいいいッ!!」

ロキ・ファミアリア^{ホーム}本拠、黄昏の館の門が開かれると同時に、館の入り口から影が飛び

出て来る。先頭に固まっていた男性団員達の横をすり抜けて、女性団員の集団に渾身の

ダイブを敢行。

「みんな無事やったかーっ?! うおーっ、寂しかったー!」

言葉と共に、おおよそ受け身の事など何一つ考えず行動に移したであろう飛び込みは、最も近い距離にいたアイズが避け、ティオネが躲し、ティオナがズレて——反応の遅れたレフィーヤが犠牲になった。

後衛とはいえLv. 3の冒険者であるレフィーヤならば耐えられたであろう突撃は、受け身を考えない渾身の飛び込みと哀れな犠牲者が予期せぬ事態に硬直していたこともあり、あつさりと地面に獲物を引きずり倒した。

「遠征の残った物資は食料、衛生用品、アイテムといつものように分類分けて倉庫に。ドロップアイテムは深層、下層のものはより分けて、それ以外は固めておいてくれ。消費した武器防具の数はラウルに報告書を渡しておいてくれ。あとでそれを纏めた資料を作って僕に提出するように、期限は——そうだね。今日を除いて二日以内だ。「二日つつすか?!」アキとアリシア、ラクタはラウルの補佐をしながら今回の遠征で起きた50層の異常事態イレギュラーと新種の被害以外での、物資の不備と問題点を洗い出して、自分達なりの改善案と一緒に報告。後日全員に伝えるからしっかりと纏めておくように。勿論、自分達だけする必要はないし、必要であれば団長僕や副団長リッペリアに質問しに来てくれても構わない。これに関しては全員協力するように。団長命令だからね? 『はい!!』それから

――

え、ちよ、きやあーと体を弄られる犠牲者の悲鳴と、ぎやあーと短い期間での仕事を申し付けられた青年が上げる叫びをを効果音にテキパキと指示を出す団長に従い各々が一様に晴れやかな顔でホームへと帰っていく。

「と、そうだ、ロキ。今回の遠征での犠牲者は無しだ。到達階層も増やせなかったけどね。詳細は追って報告するよ」

「んんうー……了解や。おかえりい、フィン」

「ああ。ただいま、ロキ」

神らしく整った容貌をへらりと崩し、暖かな声を掛けるロキ・ファミリアの主神ごとロキ。未だに己の眷族子供の身体をまさぐつていなければ、それはそれは絵になる場面だったであろう。

その横を通り過ぎようとしたベートに、ロキが声をかけた。

「あ、そやベートお。悪いんやけど、軽く身支度だけ整えたらディアンケヒトんこの冒険者依頼クエストの品、届けてくれへん？」

「…明日まとめてやった方が分かりやすくねえか？」

「そやねんけど、こういうのは早め早めにしといた方が印象いいやん？ 元々向こうがこつちの足元見てふっかけてきたためんどくさーい依頼やし。それを遠征から帰ったばつかりの第一級冒険者に、その足で納品されるとお。ディアンケヒトはともかく、ア

ミッドたんは多少なりとも負い目を感じると思うし。そら団長としての判断を間違えるような子じやないけど、お得意様に配慮する程度の良識はあるはずやろ？ こつちも遠征で色々入り用やから、こんなんで色付けて貰えるなら万々歳ーってな？」

言葉と共にレフイーヤの両手を持ち上げ、一緒に万歳させるロキ。振り解きたいが派閥に関わる事柄を話しているため、気を使っておとなしく流されるレフイーヤが不憫だった。

「フィン、ガレス、リヴェリアはいろんな報告纏めなあかんし、アイズとティオナはディアンケヒトに会った時また余計な注文付けられそうやし。……ティオネはフィンのためーって何するか分からんし」

最後の件だけ微妙に顔が煤けているあたり、いかなロキといえども苦労している所もあるのだろう。食糧庫全損事件、珍珠使えはいつてもんじやねえ、交渉に拳を前提とするな、お前が言うな、ヨルムガント出禁騒動、血の肅清事変等々。

眉根を寄せていたベートは、依然レフイーヤに抱きついたままのロキの言葉を飲み込んだ。普段はふざけているが、この主神は誰よりも眷族のことを考えている。その神が言うのだから、口車に乗せられるのが結果的にいいことなんだろう。

「——ハア。分かった」

「おおきに。疲れてるのにごめんなあ。代わりに浴場は一番に使っていいから。ぱぱっ

と汗とか汚れとか落としてきてな。というわけで、フィンー頼むなー？」

「分かったよ。依頼の品は用意しておくから、ベートは荷物を片付けたらそのまま浴場に向かってくれ。上がってくる頃には諸々の準備は整えておくから」

軽く首肯だけして、ベートは自室に向けて歩き出す。その足取りは少しだけ重そうであつた。

「で、中々無理がある理由をこじつけてまでベートに行かせる意味はなんだい？」

「えー、さつき言った通りやけど？」

「遠征直後に行かせる理由としては弱いんじゃないかな？ それこそ後日行つたとしてもそこまで対応は変わらないだろう」

ペラペラと羊皮紙を捲り目を通しながら、フィンはロキに問いかける。ベートが歩き去つて行く時に解放したレフィーヤは側に居らず、地べたに座り込む主神と報告を読む団長のみが居た。

「まあそやね。ディアンケヒトに何か頼まれても、受けるかどうかは後にしたらいいし。別に誰でも冒険者依頼クエストの品の受領なんか出来るもんな。多少の色が付けられるかはともかく。あ、でもテイオネのことはホンマやで？」

「それは知ってるよ。だからこそ、何でわざわざベートを行かせたのかを——」
「聖母マリヤの痕跡が見つかった」

羊皮紙を捲る手が止まり、サツと視線が向けられる。胡座をかいて座るロキは作業を続ける団員達に目を向けたままだ。

「痕跡って言っても相変わず大したもんでもない。が、まあ今までの件も合わせて情報の擦り合わせがしたかったみたいやな」

「……そうか」

「後日に他の皆と行って、ベートだけディアンケヒト・ファミリアに残って話すのも不自然になるから、多少強引でも行かせたってわけや」

「聖母マリア、か。痕跡の具体的な内容は？」

「ん、いつも通りのダンジョンで聖母様に助けられたーってだけの話や……けど」

「けど？」

「その聖母様に助けられた周辺で、怪しいローブの集団を見掛けたって情報があったんや。頭まですっぽりローブを被ってて、出てるのは目元だけ。その階層の前後でそんな格好する必要のあるモンスターは基本おらん。かといって、それより下の階層で同じ格好した奴らの目撃情報は全くない。途中で脱いだんか。脱ぐ位ならそこでそんな格好してる意味もない、最初から着んと堂々としてりやそつちのが目立たん」

しごく真面目な表情で地面スレスレにまで顔を近付けて、前方の女性団員のスカートを全力で覗こうとする主神の姿に気を止めず、話の続きを待つ。

視線を感じたのかサツとスカート裾を抑えて振り向いた女性団員の姿に、手を地面に叩きつけ本気で悔しがったあと、何事もなかったかのように言葉を続ける。

「怪しい集団と聖母の関連性があるのか、ないのか。いや、あるものだと考えて動くしかないか。聖母の動向は掴むことが難しいからね」

「怪我を治療して貰った。命を助けて貰った。自分の無事を涙ながらに喜んでくれた。そんな相手を突き出す事が出来るヤツがどれだけおるか。話やからな。しかも対価を求めず、無償でときたら意地汚いリヴィラの町に居る住人でも口をつぐむ奴らが多いやろ」

おまけに美人で気立ても良いときたらもうお手上げやー、と肩をすくめたロキが立ち上がる。パンパンとズボンに付いた汚れをはたき落として黄昏の館に向かって行く。眷族子供の無事を確認したし、伝えるべき事も伝えた。後はステイタスの更新やら明日の宴会の準備だと足取り軽く戻っていった。

フインはその様子を見送ってから作業に戻る。色々と問題は山積みだが、まずは皆が無事本拠地ホームに帰れた事を喜ぼう。冒険者はいつ死ぬとも分からない。だからこそ、喜ぶべき時には精一杯喜ぼう。それが明日への活力に、生への執着に、ひいては生存率の向上に繋がるから……

「いや、違うな」

ワイワイと騒ぎながら作業を続ける仲間達を見て考え直す。

「そっちの方が、楽しいからね」

フィンはクスリと笑みをこぼし、ロキの奔放さが移ったかな？ と呟いた。存外自分も本拠地に戻ってこれで浮かれてるのかもしれない。

団長室に向かう道のりは、遠征の疲労を差し引いても、中々どうして悪くなかった。

帰還の四

石畳の街路を斜陽が赤く染め上げる。昼の喧騒と夜の賑わいの間の時間。子供は遊びを終えて家へと帰り、母親は夕飯の準備に取りかかる。父親は仕事終わりに酒場に向かうか家路に着いて——町は昼間の装いから夜の姿に移り行く。

露店商も店を畳みはじめ、人氣が少なくなり、物憂げな空氣がオラリオに漂う。後少しすれば、酒場から酔っぱらいのばか騒ぎが漏れ始め、昼とは違った賑わいを見せるだろう。

ぼつりぼつりと魔石灯が道を照らし始める中を、ベートは冒険者依頼の品であるカドモスの泉水を背負いながら歩いていく。

入浴後、完全に乾ききらなかつた髪が普段よりも少し重く揺れる。ダンジョン帰りであるろうな女性冒険者が、ベートの顔をチラリと見て、隣のパーティーメンバーの女性と囁きあう。楽しげに話すその姿を見て、同じパーティーの男性陣は恨めしそうにベートを睨む。単なる僻みであると自覚しているが、身近な女性が他人の容姿を褒めていたら態度も硬くなるというものだ。

ベートがそちらに視線を向けると、男性陣は直ぐに目を逸らし、女性達はキヤー

キヤーと声を上げる。相手が誰か分かったが為の反応だ。女性達はまだしも、程度はどうあれ敵意を出した自分達が絡まれば、一卷の終わりだ。第一級冒険者なんてものは、木っ端の自分達からすれば災害と同義なのだ。

思わず出そうになるため息を口の中で転がして、飲み下す。疲れから些細なことにも気が散らされる。早く仕事を終わらせるのが良いと判断し、少し歩調を早める。

暫くすると、「ディアアンケヒト・ファミリア」を表す光玉と葉草のエンブレムが飾られた、清潔な白一色の石材で造られた建物が見えてきた。そろそろ店仕舞いするのだから。ディアアンケヒト・ファミリアの団員兼店員達が細々とした清掃に取り掛かっていた。閉店間近で用件を伝えるのは些か気が引けるが、ここで帰っては来た意味がないと、ベートは真つ直ぐ建物へ向かっていった。

「申し訳ありません。本日の営業は終了しましたので、また後日——」
「後日でも良いんだが、せめてコレだけでも受け取ってくれねえか」

背を向けてカウンターで作業をしていた小柄な女性が掛けてくる言葉に被せるように話しかける。掛けられた声を聞いてパツと振り返った女性——【戦場の聖女】の二つ名を与えられた人物——アミッド・テアサナレはベートの顔を見て直ぐにその柳眉を寄せ、サツとその全身に目を通す。

その視線に動じることなく、ベートは背負っていたバックから冒険者依頼の品である

カドモスの泉水を取り出そうとするが。

「少々お待ち下さい。直ぐに閉店しますので、お話はその後に」

「…都合が悪いなら報酬自体は今度でも」

「あちらの商談室でお待ち下さい。案内は必要ありませんね？」

——話を聞きやしねえ

ベートは微かに口元をひきつらせる。そんなベートの姿に頓着せずに、アミッドはテキパキと近くにいた団員に残りの業務の引き継ぎを進める。一拍置いて、抵抗しても無駄だと悟ったベートは半端に下ろされたバックを背負い直した。

商談室近くにいた団員に一声かけてから、扉に手を掛ける。扉の先には清潔で整えられた部屋が見える。華美にならない程度の品の良い調度品、微かに香るのは、精神を落ち着かせる作用を持たせるよう調合した香油か何かだろう。

机の上にカドモスの泉水を置いてソファアに腰掛ける。柔らかく体重を受け止めるソファアの座り心地は良かった。足の上に肘をつき、何処を見ともなく視線を漂わせて商談相手アミッドが来るのを待った——



手早く業務の引き継ぎを終え、冒険者依頼の報酬を準備し向かった応接室の扉を開けた先に見えたのは、片手で顔を押しさえ何かを堪えるようにして座る狼人の背中だった。

漏れ聞こえた舌打ちに、思わず聞いてしまいそうになる。

——ディアンケヒト・ファミリアはまだ、貴方を苛みますか？ と。

開きかけた口を閉じて、緩く首を振る。ゆるゆるとした頭の動きに少し遅れ、白銀の色をした細い長髪がさらりと揺れた。治療師は本分は傷を癒す事だ。それは身体肉体的なの傷だけでなく、時には心精神的なの傷も含まれる。

治療師は傷付いた患者を立たせる事が重要なのではない。傷に寄り添い、支え、癒すことで患者自身の意思で立ち上がって貰うことが大切なのだ。疲れたのなら休んでも良い。傷が癒えるまで座っていてもいい。また立とうと思えるまで、治療師は何時まででも共にいる。

——優しくあれ、しかし墮落させることなかれ。

いつも心に秘めている言葉。優しさは必要だ。けれど、過ぎた優しさは患者を墮落させる。時には厳しさをもって接することが、患者の為になる時もある。

——万人に優しくしなさい。けれど、万人に好かれることは必要ではない。

嫌われたとしても、それで患者が再起できたのなら、胸を張って誇るべきだ。だが、い

たずらに傷を抉るような真似をするのは治療師として失格だ。

誰にでも触れられたくないことはある。必要とされていけないのに、強引に関わろうとするべきではない。

「お待たせして申し訳ありません。過酷な遠征よりの無事のご帰還、嬉しく思います」
「ああ」

心の内を覆い隠し、アミッドは「どうぞ」とベートの前に飲み物を入れたカップを置き、挨拶の言葉述べてからベートの対面のソファに腰かけた。

ベートは机に置かれたカップに、微かに訝し気な表情を浮べる。今回は大きな商談などではなく、泉水の受け渡しと報酬の受け取りのみだ。ロキ・ファミリアに配慮して、カウンターなどで済まさず商談室を使うまでは分かるが、飲み物まで準備するのは聊か腑に落ちない。

「注文の泉水だ。要求量も満たしてはるはずだ。確認してくれ」

何かあるなら言ってくるだろうと、ベートは感じた疑問を一旦置いておき当初の目的を果たすことにした。バックから取り出した泉水入りの瓶を手渡す。

手に取り、一通り確認したアミッドは頷いた。

「確かに……。依頼の遂行、ありがとうございます。ファミリアを代表してお礼申し上げます。つきましては、こちらが報酬になります」

用意されたのは二十もの万能薬^{エリクサー}だ。

【「ディアンケヒト・ファミリア」が販売するものの中でも最高品質に類するそれらは、単価にして一本五〇万ヴァリスはくだらない。複数の小瓶はクリスタルケースに厳重に密封されており、ケースの中で、七色の液体が薄く輝いていた。

泉水と交換で受け取った万能薬の小瓶一本一本を手早く取り出しては、手の内で全体を眺めるように回転させ、ケースに戻す。

「……」

「……」

視線を万能薬に向け、確認の手を止めないベート。アマッドは自身の分のカップを傾け、喉を潤している。

その間、両者は特に会話もなく無言。どこそのアマゾネス姉妹の妹が居れば「何か暗いっ!!」と、叫びながら突っ込みでも入れそうな雰囲気だ。けれど、両者は特に気負った様子もなく動いていた。

ベートが今やっているのは報酬の確認だ。依頼の品の破損や劣化などがないことを確認すると同様に、今回のような報酬の品の品質、破損状態の確認をするのは受け取りを担当した者の責任だ。持って帰った後に破損していた、等と訴えてもどこかでぶつ

けたのだらうと言われてしまえばそれまでだ。

別に「ディアンケヒト・ファミリア」を信用していない訳ではない。しかし、信用という言葉で確認を怠るのはただの怠慢だ。

特に、ダンジョンの深層に潜ることのある「ロキ・ファミリア」にとつて、万能薬は欠かせないものである。破損、劣化によつて想定していた効果が得られなかった。それだけで全滅の危険さえあり得るのだから。

コトリと最後の一本を確認し終え、ケースの中に万能薬を戻す。

タイミングよくアミッドより差し出された受領書にロキ、ディアンケヒト各々のファミリアのサインを互いに書き込み完全に依頼を終える。

「報酬、確かに受け取った」

「はい。また依頼をさせていただく事もあると思いますので、その時はよろしくお願ひします」

「流石にカドモスの泉水は暫くは受けたくはないな」

「その時にならないと、何とも」

チクリと刺すようなベートの言葉に、アミッドは苦笑しながら言葉を濁した。足元を見た依頼だった自覚があるだけに、どうしても表情は曇ってしまうが、必要になるかどうかはその時になってみないと分からない。

言いながらそこまで本気でもなかったベートは、まだ暖かいカップの中身を飲む。爽やかな味わいが口の中に広がる。

ベートがカップを置くのを見て、アミッドは口を開きかけ——躊躇うように閉じてしまふ。

「……」

「……」

アミッドの目が伏せるようにして、長い睫毛に覆われる。下げられた視線の先で、緩く組まれた細い指が少しだけ動いては止まりを繰り返している。その姿にベートは何かを言うでもなく、受領書に目を落とす。

先程の確認の為の無言の空間とは違い、重い沈黙が降りていた。

そのまま暫く二人は動かなかつたが、ベートは吐息すると万能薬をバックの中に入れるために手を伸ばそうとして——

「——【^{マリア}聖母】が、ダンジョンの20階層付近で目撃されました」

アミッドの言葉を聞いて、ベートはその手を止める。

変わらない表情。しかし、その眼だけは違った。

睨んでいる訳ではない。怒りや、まして殺意が込められている訳でもない。ただ、ひたりと視線を合わされた。

それだけでアミッドは息を飲んだ。

治療師は怪我人を治療するという役目柄、怪我をした患者から罵声を浴びせられることがままある。痛みによる錯乱、意味のない八つ当たりなど理由は様々あるが、一々そんなことで怯んでいたら治療等できない。

どのような状況でも冷静に、「鋼の精神」をもつて事に当たる。

アミッドのL.v. は2だが、彼女は大きな傷を負って痛みから暴れるL.v. 4の冒険者に対して、一步も退かずに治療を続けたことも多くある。仮に第一級冒険者が相手だとしても、対応は変わらなかつただろう。L.v. 差で恐れるようなことは無い。

しかし、自身に向けられる琥珀色の眼が、アミッドをどうしようもなく緊迫させた。

(それでも…)

どんな些細な情報であつたとしても、^{彼女の}聖母ことは伝えなければならない。

ベート・ローガには、伝えなければならないのだ。

「…経緯としましては、探索中のパーティーが^{パスバレード}怪物進呈を受け——」

気を引き締めて、アミッドはベートへの説明を続けた。

その間、ベートの表情は終ぞ変わることはなかつた——



「以上が、今回得られた情報となります」

一通り話終わったアミッドはカップに口をつけた。すっかり冷めてしまっているが、話続けて乾いた喉には心地よかった。

逸らされることのなかった琥珀色の瞳は、今は閉じられた瞼の下に隠れている。スツと静かにベートは立ち上がり万能薬をバックに詰める。

「情報、感謝する」

ベートは短く一言だけ礼を述べると、踵を返しそのまま扉に向かって歩き出した。

扉に手を掛ける直前、服の裾を引っ張られた。掴む、というよりは摘まむような力で握られる裾は、少し身動きすれば直ぐに放されるだろう。

振り向く前に魔力の高まりを感じ、次いで詠唱の音が響く。何をしているのか理解したベートはそのまま動かずにいた。

朗々と唄い上げる声が終わわり、唱えられた魔法がその効果を現す。ベートの身体から細かな傷や痛みが消え去る。手を数度握っては開きを繰り返してから振り向いた。

聖母の話をする前とは違う、違うように感じられる眼差しは自分の思い込みだろうか……。あの日見た、瞳の奥に澱のように沈みこんだ感情を。誰にも継らず、何も溢さ

ず飲み下したであろう想いを。知っている、分かっている等とは決して言えない。けれど、その姿を見てしまった自分にはどうしても、変わらぬ筈の眼差しに言い表せない何かを感じてしまうのだ。

「二つ、訂正させていただきます」

握っていた服を手放し、此方を見るベートに今度は自分から目を合わせる。身長差の問題で見上げる形になりながら、アミッドは言葉を続けた。

「無事の〴〵帰還と言いましたが、貴方は無事とは言えませんね」

どこか非難するような響きを感じさせる声音。けれど、固い声音に対して、ベートを見るアミッドの表情はやるせなさを感じさせるものだった。

「この程度なら問題ない」

「問題のない怪我や傷は存在しません。どんな些細な傷でも、適切な治療は必要です」

今度は明確に非難の意が込められた言葉と、表情であった。怪我の軽視は治療師が一番嫌う患者の考え方だ。引つ掛かれた程度、服の上から噛まれただけ。そんな言葉と言った者達の何人が取り返しのつかない事態に陥ったことか。

今日初めて会ったときから分かっていた。遠征帰りだとしても多いと思ってしまう大小様々な傷に、顔色も悪い。遠征にはお金が掛かると、ロキ・ファミリアの方々が嘆いているのを何度も聞いたことがある。ダンジョンから戻ったからと、回復薬等を使わ

ずにいたのだろうか。そんなことを考えてしまう程度には、ベートのコンディションはよくなかった。

だというのに、ここに来てしたことは依頼の達成報告。回復薬も買う気配はなく、魔法による治療を施さなければ、何も処置などをせず帰っただろう。「ディアンケヒト・ファミリア」をどういうファミリアだと思っっているのか。

「ここはダンジョンじゃねえ」

「その通りです。ここは『ディアンケヒト・ファミリア』の施設で、私は治療師^{ヒイラ}。怪我人を治療することが私の役目です」

ムツとした表情で語るアミツドの姿は、他の団員が見れば「珍しい」と言葉を漏らしたに違いない。普段冷静沈着な彼女がそんな姿を見せるのは、とある神の眷族の犬^{シアシロ}人とやりあっている時くらいだ。

「頼んだ覚えはない」

「はい。本日の『ディアンケヒト・ファミリア』の営業は終了しました。ですから、今のは私がしたかったです。私が、傷付いた貴方を癒したかった。それだけです」

手袋に包まれた手を自身の胸に添えて、少しだけ微笑みながら言い切った。その姿

にベートは——諦めたように体から力を抜いた。

「…そうか」

「はっ」

おもむろにベートはポケットから袋を取り出し、それをアミッドに手渡した。小首を傾げながら袋の口を開けると、中にはダンジョン深層でしか採れない、治療薬に使える貴重な素材が入っていた。

「直ぐに代金を——」

「要らん。治療代だ」

「治療は私が勝手にやったことです。それに対価を頂くわけには、ましてこれは治療代にしても多過ぎます」

「ファミリアを通してないなら正規の価格じゃなくても問題ないだろう。足りないならまだ出すが、多い分には問題はないだろ。俺が勝手にやったことだ」

「…強情ですね」

不承不承といった様子で、素材を受け取ったアミッドに「不服ならドロップアイテムの鑑定の時にも多少色でもつけてくれ」と言つて、今度こそベートは扉に手を掛けた。

「第一級冒険者の方には言うまでもないかもしれませんが、魔法での治療は体の傷は癒

せても精神の疲弊までは回復できません。ですので、今日はしっかりと休養をとってくださいね」

「ああ」

【「ディアンケヒト・ファミリア」の本拠の入り口まで付き添っていたアミッドは念を押しすように言うが、ベートは軽く相槌を返すだけだ。

その対応にため息を吐くでもなく、慣れたようにアミッドは頷いた。言葉少なな返事だとしても、事情がなければ一度言ったことを簡単に反故にするような人物ではないと、彼女は知っていた。

去っていく後ろ姿に一礼をし、アミッドは仕事に戻る。営業時間が終わっても何かとやることはあるのだ。翌日の予定を思い出しながら、準備をしていく。

一度だけベートが向かった方へと顔を向け……首を振って作業を続ける。思うことはあれど、それが今の作業を疎かにしていい理由にはならない。

アミッドはぱしりと頬を軽く両手で叩いて気持ちを切り替え、残る仕事をこなしていく。



「デュアンケヒト・ファミリア」の本拠から出て、日が落ちて暗くなった街路を本拠に向けてベートは歩を進める。

酒場は喧騒に包まれて、陽気な酔っ払いたちが声を上げる。昼よりは人通りが減つても、宵の口である今のオラリオは静寂とは程遠い。騒ぐ人々の合間を縫うように歩くベートは「デュアンケヒト・ファミリア」で聞いた情報を思い返していた。

（聖母が目撃された二十層付近、ならリヴィラの町で何か情報を……チツ、どうせ無駄金払わされて意味のない上に真偽が定かじやない話を掴まされるだけか）

今までも似たような情報はあつた。見た、聞いた、助けられたという声はあれど、正確な位置や何をしていたのか等の具体的な内容は今まで一つもなかった。聖母の痕跡の隠蔽が巧みなものもあるが、何よりも聖母が現れた時には必ず誰かを助けていることが足取りを追うことの難易度を跳ね上げている。

——私が向かった先を言わないでください。

その一言だけで目撃者は口を噤む。ダンジョンに現れる「幸運の癒し手」。そんな通り名が出来る程に聖母は誰かを救つてきた。

冒険者は験を担ぐ。例えば、一本の酒を飲むときに半分だけ飲み、もう半分はダンジョンから無事に帰って来られるように残しておくなど。

誰が言ったのか【幸運の癒し手】に助けて貰ったなら何も聞くな、聞けばせつかくの幸運が逃げてしまう何て言うジंकクスが信じられている。

そのせいで入る情報があまりに少ない。分かっているのは何人かの仲間がいるということだけだ。それにしても人数も種族も分かかっていない。

実体はあれど実像が掴めない。無理に探そうとすれば他の冒険者からの反感を買う。そうなれば今までよりも更に情報が集まらなくなるのは目に見えていた。だからこそ強引に聞き出すことは出来なかった。

だが、ここに来て新しい情報が入った。怪しいローブの集団。それが本当に聖母と関わりがあるのかは分からないが、何らかの手懸かりになる可能性はある。もし仮に、関わりがあるのであればベート・ローガ^俺は…

——私は、ただ救いたいのです。

足を止めて空を見上げる。暗い空には雲一つ無く。欠けた月がゆつくりと天頂に向かつて登っている。

それを眺めながら思う。初めて彼女と出会ったあの日、彼女に共感すれば良かったのか、出会わなければ良かったのか。

それとも——

■ ■ ■ いれば良かったのだろうか

視線を戻して歩き出す。街路に立ち止まっただけでは邪魔にしかならない。疲れた体を休める為に、喧騒に包まれながらベートは自身の本拠地ホムへと帰っていった。

その道のりは遠征の疲労を差し引いても、重く遠く感じられた。

帰還の四？

「夜は打ち上げやるからなー！ 遅れんようにー！」

朝食を終えた後、主神であるロキに見送られながら、街路を経て目抜き通り——北西のメインストリートに出た。目的は遠征の後処理——ダンジョンから持ち帰った戦利品、武具防具の整備ないし再購入、道具アイテムの補充など——が目的だ。遠征帰還後はやることは山積みになっていて扱う量も量なため、ほぼ団員総出だ。それぞれが役割を振り分けられ、目的地も違うが、ギルド本部までは全員で向かっていた。

時刻は朝の九時を回った頃。多くの者がダンジョンに向かう直前の時間帯なので、迷宮探索の前準備のため、街路には多くの冒険者が溢れていた。その中でもロキ・ファミリアは周囲からの注目を集めていた。オラリオでも指折りの実力を持つ彼等の存在は誰もが知るところであり、様々な羨望とやつかみ、何より畏怖を向けられている。

ベートがギルドのロビーで向けられていたモノと同種の、しかし多さの違う感情の波だ。集団で進む彼等の道を阻むものは居ない。やつかみの視線を向ける者も、イラついたように何事か悪態を吐く者も、皆一様に道を開けていた。

「なんかやだなー、こーういの。いい加減慣れたつていえば慣れたけどさー」

「なら文句言わない。一々言っても仕方ないでしょう」

「でも、テイオナさんの言うことも分かります。自分が偉いわけでもないのにつて思つてしまつて」

「だよねー！ ほらレフィーヤもこう言つてるじゃん」

「ばかテイオナ。そういうのも含めて言うなつて言つてるの。辟易してるのはこっちも同じよ」

「文句言うくらいいいーじゃん。テイオネのケチ」

「あ、あ、ん？ 誰がケチだつて？ あんまりくだらないこと言うようならひつ叩くわよ」

「ま、まあまあまあ！ 二人とも落ち着いて!! そ、そうだベートさんは今回来られないんですか!？」

何気ない会話から流れるように喧嘩になりそうだった姉妹を仲裁せんと、レフィーヤは集団に同行していい狼ウエアウルフ人の青年名前を出した。

「あやつならホームで書類の処理をしておるわ」

「そうなんですか?」

「ああ、罰の一環だな」

たつぷりとした髭を撫でながら、ガレスが慌てているレフィーヤに助け船を出す。ア

マゾネス姉妹もファミリアとして視線を集めている中でこれ以上醜態を晒すつもりはないのか、お互いに矛を納めてガレスに顔を向ける。

「罰って、深層でのことですか？」

「つて言ってもあれは団長公認だったじゃない」

「たわけ。公認ではなく事後承諾だったじゃろうが」

「許可出てるなら一緒じゃん」

「……罰を受けているベートのの方が弁えとるのはどういう見なんじゃ」

呆れたような声で呟いたガレスの声は、空しくメインストリートの喧騒に吞まれていった。



ロキ・ファミリアホーム、黄昏の館の一室。柔らかな日差しが窓から注がれている。カリカリと淀むことなく、一定のペースで羽ペンが羊皮紙に文字を綴り、机の上に重ねられた羊皮紙が次々に処理されて振り分けられる。

「あの、ベートさん。この書類は――」

「……フィンに渡す分に纏めとけ。そつちのはリヴェリア、それ以外はラウルだ」

「は、はい! ありがとうございます!」

チラと兎ヒュームバニ人の少女から差し出された書類を一瞥して指示を出す。コキリと首を鳴らしながら次の書類に取り掛かる。休憩を取ってもいくらいの時間は経っているが、朝に食事を取ってから休まずに続けていたので残りも少なくなっていた。ここまで来れば後は半端に休憩をするよりもやり切った方が楽だ。

この後にも遠征から持ち帰ったアイテムや魔石の売却、武器防具の整備費等々出ている団員達が戻ってくればまた書類が増えるが、それは団長であるフィン達が戻ってきた後の話。今ある分は遠征中に溜まった書類だけなので、多いことは多いが捌けないこともなかった。

そして、最後の一枚を捌き終える。淡々と後片付けを終えて、ベートは席を立つ。遠征の間は暫くなかった、椅子に長時間座り続けているの事務作業。モンスターを相手にするのはまた別種の疲労感があった。

「あ、ベート仕事終わった?」

「ロキ」

立ち上がったてきて昼食でもと思った矢先、主神ロキが話しかけてきた。

「何か用か」

「用がないと話しかけたらアカンのく？　もうベートのい・け・ず」

語尾にハートでも付きそうな甘ったるい喋り方に、両手を頬に添えてくねくねと上体を揺らす様はどうしようもなく苛立ちを煽った。傍から見えていた団員でさえイラツとしたのだから、直接言われたベートなどは言わずもなだろうと、視線を向けるが。「無いらしい」といつもの無表情のまままで横を通り過ぎようとしていた。

『ベートさんすげえ』と、本当にどうでもいいことで団員達の評価が若干上がった。

「冗談やんかじよーだん。ベートは相変わらずやなあ」

「要件は？」

「せっかちなんはモテな——ああっ待って、言うから行かんといてえー」

ズルズルと歩き去ろうとするベートの足に抱き着いて縋る様は、神の威厳などあったものではない。しかし周りの団員は呆れながらも慣れてるのか、その姿を見てもため息を吐くだけだった。

「……で？」

「おお、流石に調子乗りすぎたわ。ベートの対応がめっちゃ厳しい」

「んー」とロキはごそごそとポケットを探り、目当ての物が見つかったのか握りこぶしが突き出される。受け取る為に手を差し出すと、くしゃくしゃになったメモが落とされた。皺を伸ばしながら広げると——

触れ合い喫茶おんにやの娘パラダイスという店の請求書だった

「……幾ら欲しい?」

「リヴェリアに渡しておく」

「うちに死ねとツ!」

真顔でバカなことを言つて来る主神を無視して今度こそ本来渡されるべきだったメモを受け取る。

中身は雑多で一貫性がないものばかりだった。傾向としては趣向品が多いようだが、と頭を抱えるロキに目を向ける。

「アカン、このままやと今月のうちの小遣いが……ん? あーそのメモの中身はあれや。今回の遠征前に皆が頼んでた諸々の品や。あんま早く受け取りに行つても邪魔になるし、小物類除いて取り置きしててもらつたんよ。で、せつかくやから打ち上げん時にも渡そう思てな?」

ロキの説明を聞き、ふうんと緩く頷く。遠征の前に個人の趣向品を頼む、というのは、ままあることだ。縁起が悪いと忌避する者もいるが、それと同じ位にはこの冒険が終われば○○を食べる、飲む、買うんだと嗜好品を取り置きする者は多い。

何があるかは分からない迷宮に挑むからこそ、モチベーションを高める為に明日^先への希望、活力として分かりやすいアメを自分で用意するのだ。先が見えないというのは不

安が積もる。いつ終わるのかと精神が削られる。そんな時にこれが終わればと気力を高める為のものとしての嗜好品。

これが意外とバカに出来ないのだ。

単純で、だからこそ分かりやすく効果がある。ただし、これが終われば結婚するんだ、告白するんだとかいうことを口にするのは神々から猛烈に止められる。曰くシボウフラグだとかいう物が働いて、窮地に陥りやすくなるらしい。主にシボウフラグは恋愛関連の言葉に多いとはどこぞの暇な冒険者が調べたことだったか……。逆にその手の行動や言動を乱立させることで生き残るセイゾンフラグなるものもあるとかないとか。

——つまりは相も変わらず、神々の考えは下界の者には理解が及ばないということだ。

「ジャガ丸くん」

「アイズたんのやな！」

「ドワーフの火酒、樽」

「ガレスのやつやな」

「……愛の秘薬」

「……テイオネの、やったかなあ」

（待て、俺が買いに行くのか、これを？）

ジャガ丸くんは良い、火酒も樽とか頭おかしいがまあ良い。その他のものも良いが、愛の秘薬だけは嫌だ。愛の秘薬等と銘打っているがようはこれは禁制品ではないそういう用途に使われる品である。生物の本能に働きかける、簡単に言えば媚薬の類なのだ。

自分が頼んだものではないとはいえ、その手の店に入った事実がマズイ。誰かに見られれば何を言われるか分かったものじゃない。面白おかしく脚色されて騒ぎ立てる神々の姿が目につかぶ。

「罰やから諦めえ、ベート」

ほんほんと腕を伸ばして肩を叩くロキー―反対の腕で先ほどの請求書をくすねようとしてゐる―に「わかってる」と返して自室に向かう。

恐らくこれで終わりになるであろう今回の罰だが、最後の最後に面倒なものがやってきた。

(……早く終わらせるか)

色々と考えてみたが受ける以外の選択肢もなく、今更ぐずぐずしていても仕方ないし、面倒は早く終わらせる方がいいものだ。リストを見る限りそこまで時間の余裕もない。

資金を受け取り、支度を終えたベートは門番に見送られて、足早に雑踏の中に紛れて

いった。



「いらつしやいませ、『ロキ・ファミリア』の皆様」

「アミッド、久しぶり！」

テイオナが気さくに手を上げて声を上げる。折り目正しく、アイズ達を出迎えた
【ダイアンケヒト・ファミリア】の団員であるアミッドは彼女らの無事を喜んでいた。薄く笑みを
浮かべた。アイズ達と顔見知りのアミッドは彼女らの無事を喜んでいた。先日来てい
たベートの様子から、無事だろうと思つてはいても、実際に目にするまでは完全には安
心できないのは治療師ヒュラとしての性だろう。「どうぞこちらに」とさりとこぼれる細い
長髪を揺らしながらアイズ達を先導する。

【ダイアンケヒト・ファミリア】の施設内は薬の販売場、治療の為の診療室、待合室など
何処も多くの人で溢れていた。商売繁盛とはいえ、薬の販売はともかく治療関連の施設
の需要が高いのはあまり歓迎すべきではない。怪我も病気も何事もなく、日々健やかに
暮らしてくれることが一番なのだから。

アイズ達をカウンターの一角に案内したアミッドが声をかける。

「それでは改めて、本日のご用件を伺っても？ 必要であれば商談室にご案内しますが、生憎と今は空いていませんので、少しお待ちいただくことになりましたがー」

「ああ大丈夫よ。そんな大それた用事でもないし、ここで十分」

「アミッドこそあたし達の相手してて大丈夫ー？」

「はい。今は緊急の患者もいらっしやいせんから、問題ありません」

「そ、なら良かった」

テイオネはちよいちよいとアイズを手招きする。こくりと頷いて、アイズはカウンターの前に歩み出る。持っていた長筒の容器を開け、巻いて収納してあったドロップアイテムをアミッドに差し出した。

「……………これは」

『『カドモスの皮膜』よ。冒険者依頼のついでに、運良く手に入ったわ』

アミッドが静かに驚嘆する。

市場に滅多に出回らないドロップアイテムを前にして、彼女は手袋をはめ慎重に目を通し始めた。

『カドモスの皮膜』は優秀な防具の素材になる一方で、回復系の道具の原料としても重宝されている。商業系のファミリアからすれば、その希少性もあって、喉から手が出るほ

ど欲しいドロップアイテムの一つだ。

何せ、前提条件として、ダンジョンの深層まで行くことの出来るファミリアでなければならぬ。次に、強力なモンスターであるカドモスを討伐出来る戦闘力。最後にカドモスの皮膜がドロップする運が必要なのだ。前提条件の段階でかなり対象が絞られるのだから、アミッドが驚嘆するのも当然だ。

「……本物のようです。品質も申し分ありません」

「そう。それで、買値は？」

「七〇〇万ヴァリスでお引き取りしましょう」

「一五〇〇」

——ここぞとばかりにティオネが吹っ掛けた。

ぎよつとティオナとレフィーヤが目を剥き、アイズさえ小さく驚く中、彼女は不敵な笑みを浮かべている。人形のような表情を崩さないアミッドも、ぴくりと肩を揺らす。

「お戯れを。八〇〇までは出しましょう」

「アミッド？ 貴女の言った通り、この皮膜の品質は申し分ないものだと思おうわ。今まで市場に出回ったものよりも遥かに上等だと自負できるほど……一四〇〇」

熱く静かな商談の幕が切つて落とされる。突然始まった水面下の激しいやり取りに、アイズ達は一瞬圧倒された。

「ちよ、ちよつと、ティオネっ?」

「私達は団長から『金を奪つて来い』と、そう一任されているのよ? 半端な額で取引するつもりは毛頭ないわ」

「それはどこの団長の話ですか! 流石にそこまで言われてませんっ!」

使命感——ではなく思い人に褒めて貰おうという打算——に燃えているティオネ。この欲に忠実な様こそがアマゾネスとばかりに暴走気味な少女には、実妹の声もエルフの少女の叫びも聞こえない。アイズはただただその光景を注視するばかりだ。止まりそうにない、というのが理由の大半を占めるが、実際に遠征での消費を考えると売価が上がるのは喜ばしいことではあるので、強制的に止めに入っていない。後、残った三人には交渉の為のスキルが足りていないのも理由だ。ティオナは相場等が理解できていないし、レフィーヤは押しが弱い、アイズに至ってはそもそも対人能力コミュカが足りていない。手に入れたのが彼女らだから、というだけではなく、知り合い且つ見た目が良く、世話になる機会の多い「ディアンケヒト・ファミリア」のアミッド相手に強気な交渉が出来る手すきの団員——と考えた場合、合致する人員が意外に少なく、団長判断で適役とされたのがティオネだったのだ。因みにこれらの事情は本人達には知らされていない。知らせていたら、気合いを入れすぎたバーサーカーティオネの手によって、この交渉はもつと醜いものになっていたこと請け合いだろう。

その辺りを見極めは流石フィン・ディムナといったところだろうか。

カウンターに肘を置き、身を乗り出して来るティオネからアミッドも目を逸らさない。容姿端麗な少女達が顔を寄せ合う姿に、何人かがごくりと生唾を飲んで見入っていた。

「八五〇。これ以上は出せません」

「今回戦った強竜は活きが良くてね、危うく死にかけたわ。私達の削った寿命の分も加味してくれるとありがたいんだけど？」 一三五〇」

『カドモスの皮膜』を入手した経緯を知るティオナ達は、ティオネにそれぞれ思うところのある視線を送る。

今回の『カドモスの皮膜』はそもそも新種のモンスター、気色の悪い芋虫型のモンスターと強竜カドモスが争った跡と思わしき場所から手に入れた物だ。つまりただの拾い物で、別にカドモスと戦って得た訳ではない。

態々不利になる事を言うほどお人よしではないが、それでもその表情が微妙なものになるのは、まだまだ年若い彼女たちからすれば仕方ないことであろう。

「……少々お待ちを。私の一存では決めかねますので、ディアンケヒト様とご相談して参ります」

「あら、じゃあここでの換金は諦めましょうか。時間もないし、もったいないけど、他の

フアミリアに引き取ってもらうことにするわ。『カドモスの皮膜』、しかもこんな上物、どこのフアミリアでもきつと欲しがらるでしょうね……『カドモスの皮膜』自体、次はいつ持ち込まれるか分からない物だし」

「それに……直近で遠征予定のフアミリアも無かったから、ね」と囁くようにアミッドに言い、『カドモスの皮膜』の入った長筒を、ゆらりと手先で揺らしながら流し目を送るテイオネ。

びたりと動きを止めるアミッドに、テイオネはにっこりと満面の笑みを向ける。流石にやり過ぎではないかと思つたテイオナが声を上げる前に、視界に酒樽が入ってきた……。声を上げるのも忘れて思わずそちらを注視する。

治療院に似つかわしくない、明らかに酒屋か酒場で置かれているべき品がすぐ横に來たため、無言になったテイオナの様子に気が付いたアイズとレフィーヤもそれを^{酒樽}を見て目を白黒させる。

酒樽がアイズに向けて袋を突き出した。

「……………え、あ、はい」

思わず、といった様子で反射的に袋を受け取る。アイズはその袋の暖かさと鼻孔をくすぐるその香りに、中身をすぐさま察して、無意識に頬を緩めた。袋の口を開けて中身を覗くと、中には想像通り出来立ての『じゃが丸くん』が入っていた。

「いただきます」

「渡した俺が言うのも何だがここでは食うな」

「つて、ベート？ どうしたの色々と、というか何、この酒樽」

「ガレスに言え」

「どーゆーこと？」と首を傾げるティオナを適当にあしらい、酒樽……を持ったベートは空いた片手を使い、腰に下げた袋から怪しげな小瓶を取り出した。

「おい」

「ああ？ 今いいところなんだから邪魔する——」

あと一押し、というところで水を差されたティオナが据わった眼で振り返る——前にカウンターへと小瓶が置かれる。それを見たティオナは、手に持っていた『カドモスの皮膜』放り出して小瓶を掴み取った。

『ちよッ!?!』

空を舞う『カドモスの皮膜』。レフィーヤとティオナが声を上げ、アミツドが目を見開き、アイズはじゃが丸くんに夢中だ。

「……何やってんだ」

「これッ!! 愛の秘薬の中でも最上級、市場に回ることがほぼない事で有名な一品じゃない! どうやって手に入れたのよ」

「どう」

「いえ経緯なんてどうでもいいわ! 重要なのはこれが私の手の内にあることよテイオナここはアンタに任せるわしっかり稼ぎなさいいいわね私は準備があるからいい? 任せたわよ!!」

空中を泳いでいた『カドモスの皮膜』をベートがキャッチし視線をテイオネに向けるが、彼女はそちらを見向きもせず一方向的に捲し立て、施設のドアを砕かんばかりの勢いで爆走していった。

「……で、これの鑑定は終わってんのか?」

「鑑定自体は終わっています。今は価格の交渉中でした」

「え、テイオネさんの事は触れないんですか!」と固まっていたレフィーヤが慌てるが、ベートもアミッドも気にした様子はない。ベートは普段からテイオネの奇行には慣れている、アミッドもアイズ達ほどではないがテイオネのフィンへのいささか……いささか、行き過ぎた愛情表現を知っている。……アミッドはアイズ達と友人であるが、友人だからといって行動全てを肯定出来るわけではないのだ。

「そうか。あいつは幾らで交渉してた?」

「……一五〇〇です」

「……随分と」

アミッドが告げた価格にベートは表情を変えず、しかし声色には多分に呆れの感情が込められていた。ベートから見ても今回の品は上物だったが、せいぜい一〇〇〇〇が妥当な線だと思う。そこから更に五〇〇乗せるとなるとかなり厳しい。

「今回は」

「あ？」

「今回は一二〇〇……いえ、一三〇〇でお引き取りさせて頂きます」

「ええ！　いいのアミッド!？」

「はい。足元を見て冒険者依頼クエストを発注したのはこちらが先ですの」

思わず聞き返してしまったテイオナだが、アミッドは苦笑しながらも肯定し「それにと、言葉が続けてベートを見る。

「約束、しましたから」

「約束？　何のこと」

首を傾げるテイオナに、アミッドは小さな唇に細い人差し指を触れさせて、ふわりと微笑みながら「内緒です」と返した。周りで見ていた面々が思わず赤面してしまうほど、可憐な笑みだった。

「す、すみません……」

「いえ、足元を見て冒険者依頼クエストを発注したのは、こちらが先ですの」

商談で謝るのも場違いだが、テイオネの一連の暴走を考えれば思わず謝ってしまうのも仕方がない。

恐縮するレフイーヤの手に、用意された大きな麻袋が渡される。ずしりとした重さ
と、じやらじやらと大量のヴアリス金貨が擦れる音が、金額の大きさを物語っている。

「あ、ベートもう行くの？」

「まだやることがあるからな」

テイオナの問いに端的に答えて、ベートは施設を出て行った。アイズ達も商談金額から考えれば気休めにしかならないが、遠征で消費した高等回復薬ハイ・ポーシオンそれぞれ個人用に購入した。

「それじゃ、アミッド。またね」

「また」

「ありがとうございます！」

「はい。またのご利用、お待ちしております」

お辞儀するアミッドに軽く挨拶を交わし、アイズ達も施設を後にした。

「あー、今度アミッドと顔合わせづらいな。テイオネやり過ぎだつて」

「ファミリアとしては良かったんですけど、さすがに……」

「じゃが丸くん、おいしい」

北西のメインストリートを歩く。正午を過ぎたところだが、朝見かけた冒険者達の姿は、今は疎らになっていた。目に映るのは無装備の、本日は休業と思しき冒険者ばかりだ。頬を緩めてじやが丸くんをほおぶるアイスから、「一個ちようだい」と言ってもらった物を同じように食べるテイオナ。

「でも、ベートさんが来てくださって良かったですね」

「確かに助かったね。約束とか言ってたけど、ベートが何かしたのかなー。昨日治療院に行つてたみたいだし」

「何の用だったんでしようか。遠征直後に行くなんて」

「冒険者依頼クエストの、カドモスの泉水を持って行つたつて聞いたけど」

「そうなの？ わざわざ昨日行かなくても今日まとめて行つた方が良い気もするけど」

からりと晴れた空が続く中、話ながら歩くアイス達は、途中で二手に分かれた。大量のヴァリス金貨を持ったままなのは気が重いとホームに戻ったレフィーヤと、武器の整備に行くアイスとテイオナだ。

「あ、そうだ。アイスに聞きたいことがあつたんだ」

「どうしたの？」

幾つか話題を変えて雑談する中で、テイオナがぼんと両手を合わせて顔をアイスに向けた。

「ねえ——アイズは聖母^{マリヤ}って知ってる？」



(あ、まさか約束って色付ける云々の話か?)

リストの品があと少し、というところで今更「ディアンケヒト・ファミリア」での事に思い至る。そして、思い切り顔を顰めた。貸しか借りかは個人同士ならそこまで問題ではない。特にアミッドなど誠実な人物であれば、よっぽどのことがない限りリスクは少ない。

しかし、今回は金額が大きい上に、個人間の貸し借りをファミリア単位まで上げてしまっている。

正直暴走したテイオネの責任だろうと思うが、貸していたのはベートなのだ。とかそんな細かい所など関係なく、ディアンケヒト・ファミリアの主神たる老神は喜々として厄介ごとを押し付けて来るだろう。

こう立て続けに厄介ごとが降りかかると流石に気が滅入る。慣れている、といえば更

に虚しさが込み上げて来るが、事実慣れているのだから他に言いようがない。厄介ごと面倒ごとに巻き込まれるのが多すぎて嫌になる。自分から首を突っ込んだ覚えもないのに、いつの間にか渦中に居るなんてことは多々あった。

鬱々としてきた思考を打ち切り気持ち歩く速度を早める。まだリストは残っているし、宴会までには間に合わせなければまたロキがうるさいだろう――

「……気のせい、か」

急に振り向き、構えたベルトに不審な目を向ける周りを無視して、感じた違和感の正体を探すが、見つけることはできなかった。

誰かが好奇心で一級冒険者自分を見ていたのか、それとも別の何かだったのか。判然としないが今出来ることはないとして、ベルトは買い出しに戻った。

感じた違和感は、恐らく視線だった。

敵意でも殺意でも観察でもない。

もつと柔らかで、いつそ見守るような、慈愛を感じさせるような――



ベートが去った後のストリート。

人数こそまばらでも、滅多に人通りが無くならない街路から違和感なく、ちようど太陽の光が一時小さな雲で隠されて途切れるように、自然と喧騒が無くなった中。

ぼつんと白いローブを着た人物が現れ、ベートが歩き去った方向を少しだけ見つめていた。

しかし、その姿も陽炎のように揺らめいて直ぐに消え去った。

喧騒が戻る前、呟かれた言葉は誰にも届くことなく、風に包まれて持ち去られた。

——また、会いましょう。優しい貴方

遊宴の五

降りしきる雨が、暗く濃い影となつて街路を叩く。乱雑に地面を叩く雨の中で動く、幾つもの人影。人気の無い裏路地で、多数の人影に対峙するように一人立ち塞がる影。

『……………、……………ツ！』

『……………』

打ち付ける雨と吹きすさぶ風によつて消え去りそうになりながらも、確かに届く言葉。

短いやり取り。

分かつていた答え。

必然の決別。

『……………』

最後に一言だけ呟き、たった一人の影は突き進み、応戦の意を示す多数の人影と激突した。

ばしやばしやと水溜まりをはね飛ばして、影は踊る。

天上におわす神々からの視線を遮るように、天を覆う雨雲は、重く分厚く広がって。

激しさを増す雨は人も地上の神々も、その場から遠ざける。

誰にも見られず、誰にも顧みられることのない、空しくて、虚ろな戦い。得るものは無く、名誉も誉れも有りはしない、ただ失っていくだけの争い。

影が動き、近付く度に集団は一人、また一人と雨に濡れた街路へその身を沈めていった。

雨音に混じる誰かの声と、肉を打ち据える打撃音。時折見える紅い雫は、直ぐに雨に紛れて黒く染まる。

震える手で最後の一人を沈め、後に残されたのは立ち塞がっていた人影だった。紅い雫が全身を染め上げ、すぐにその鮮やかさを失い赤黒く変色する。雨で洗われることのないそれは、まるで赦されることのない罪の証のようで――。

見上げる空は黒く。顔に当たる雨は冷たく、容赦なく熱を奪う。

軋むように薄く開いた唇から漏れ出る声は意味を持たず。

叫ぶことも、嘆くことも、哮ることすらも出来ずに、ただ立ち尽くすばかり。

――雷鳴が、近づいてきていた



遠征の後に盛大な酒宴を開くのが、「ロキ・ファミリア」の習慣だ。

眷族の労をねぎらうという名目のもと、無類の酒好きであるロキが率先して準備を進め、団員達もこの日ばかりは大いに羽目を外す。遠征の後処理を終えるころにはすっかり日も暮れ、東の空は夜の蒼みがかかり始めていた。

遠征に参加しなかった一部の団員達に留守を任せ、彼等の羨ましそうに見送られながら宴会の会場となる酒場を目指す。

「ミア母ちゃん、来たでー！」

魔石灯に照らし出される盛況な大通りを歩き、残照が消えて完全な夜を迎えた辺りで、ロキが予約を入れた酒場に到着した。威勢よくロキが酒場の女将の名を呼ぶとすぐにウェイトレス姿の店員がロキ達を出迎える。

西のメインストリート中でも最も大きな酒場『豊穣の女主人』は、ロキのお気に入りだ。店員が全て女性であるのと、そのウェイトレスの制服が彼女の琴線に触れたのだと、団員達は悟っている。

「お席は店内と、こちらのテラスの方になります。ご了承ください」

「ああ、わかった。ありがとう」

酒場にはカフェテラスが存在した。

恐らくはアイズ達一行が入り切らないための処置だろう。礼儀正しいエルフの店員にフィンが礼を言い、手早く団員達を二つに分け、テラスへ座らせる。

酒場は満員だった。予約していた為にぽっかりと空いているアイズ達の席が不自然に見える程、酒場は様々な種族の者達が飲み騒いでいる。店内は木張りで、他の酒場と比べると落ち着きのある内装だった。店内に吊るされている魔石灯の光量も抑えめで、どこか洒落た雰囲気がある。

「……の料理美味しいんだよね。いつもつい食べ過ぎちゃってさ」

「……は料理の種類も豊富ですから、色々食べたくなっちゃいますからね。——ただどれも量が多めなので、油断していると大変な目に遭いますけど」

入店してきた「ロキ・ファミア」を見て、例のごとく客の冒険者達が顔色を変え声をひそめですが、ティオナ達も気にした様子もなく席に着く。好奇の目に晒されるのは好きではないが、もう慣れてるし、楽しい食事中にまで気を使いたくないのだ。

ロキ、フィン、リヴェリア、ガレスは奥のテーブルに着き、フィンのは隣には何時ものようにティオネが一仮にランダムで決まった席だとしても全力の威圧で席を譲らせる。座る。アイズとレファイヤーの手を引いてティオナが同じテーブルに納まる。

「よっしゃあ、ダンジョン遠征みんなぐくろうさん！ 今日には宴や！ 飲めえ!!」

立ち上がったロキが音頭を取り、次には一斉にジョッキがぶつけられる。団員達は各々盛り上がり、酒を飲み料理に舌鼓を打ち、談笑を楽しむ。

宴会が始まった。



(もう宴会は始まつてるか)

雑多に抱えた荷物の位置を調節しながら、ベートは街路を進んでいた。思ったより時間を食ったせいで遅くなつてしまった。

またぞろロキに何か言われるかと考え、リストの品が多かったので俺のせいじゃないなど結論付けた。それでもこれ以上遅くなるのは具合が悪いと、気持ち歩く速度を上げる。

魔石灯が道を照らし、そこかしこで騒ぐ声が聞こえる。酒樽を抱えながら、ベートは器用に人込みを縫つて進む。

人込みを抜けた先、一時の切れ間のような空間。その先から歩いてくる紺色のローブを纏った人物。それを見てベートの表情がぴくりと動き、逸らすでも注視するでもなく

視線を前に戻した。

コツコツと靴底が石畳を叩く音が響く。ベートとローブの人物の距離が縮まり、すれ違つて――。

「あら、挨拶の一つもしてくれないのかしら？」

玲瓏な声が、ベートの足を止めた。正確には声を掛けられてなお、そのまま進もうとしたベートに対して向けられた、無数の敵意に反応してベートが止まったのだ。

振り向いた先で、フードが外される。

星が流れるようにフードから零れ落ちた銀の髪。何もしていなくともただ在るだけで、蠱惑的に見える完ぺきな均整のとれた肢体に、輝く銀の双眸。指先一つ視線の動きに至るまで、美しい所作とはこうである。と断言できる佇まい。下界の人々子供達どこか同格の神々ですら魅了する、美を司る神。ベートの所属する「ロキ・ファミリア」と同格、或いは凌駕すると言われているもう一つの都市最強。

「フレイヤ・ファミリア」の主神、美の神フレイヤがベートを見て微笑んでいた。

「……お会いできて光栄です、神フレイヤ」

「フフフ。ええ、私も貴方に会えて良かったわ。退屈なパーティーから帰ってきて、気分展開に馬車を使わず歩いて散策してみたなら、望外の出会いというものね」

上品に口元に手を添えて笑うフレイヤの姿に、未だにベートを捉えている敵意が強

まった。ベートは数瞬そちらに意識をやり、頬に触れようとする手を反射的に弾こうとして無理やり止める。

手袋越しに感じる嫋やかな指先。ベートの目を覗き込む双眸と視線が交わる。見られて、瞳を通して奥底を覗き込もうとするような視線。

「……何か？」

「——いえ、ごめんなさい。無作法だったわね」

どこか残念そうな声と共に手が離れ、フレイヤ自身もベートから一步離れる。

「今から宴かしら？」

「ええ」

「そう。なら、余計な時間を取らせてしまったわね」

「お気になさらず」

「ありがとう。ところで——あの話は考えてくれたかしら？」

ぴくりと肩を震わせ、ベートはゆっくりと首を横に振る。

「そう、残念ね。とても、残念だわ」

目を伏せ、悲し気に眦を下げるフレイヤの姿は、男女の隔たり無く、誰でも思わず手を差し伸べてしまいそうになる儚さを湛えていたが、ベートは動くことなく少しだけ怪訝そうな表情を見せた。

言葉に嘘はないだろう。真実フレイヤは残念に思っているが、その質、もしくは落胆の大きさに前ほどのものがないように感じたのだ。気を持たせる そういう駆け引きもこの神は容易くこなすが、それとはまた違う。強いて言うなら――。

「誰か、目当ての冒険者 いい人でも見つかりましたか」

「あら、流石の慧眼と言うべきかしら。それとも嫉妬してくれていると思っても？」

ぱちりとした瞬きの後に、楽しそうに問いかけて来る。答えは再度の首振り。「つれないわね」と零して、自身の髪に触れる。

(そりゃぐ自慢の眷族けしか嘸けてまで、ちよつかいかけてきた相手が、和やかに話しかけて来たら理由ぐらい察するだろうよ)

以前を思い出しているベートに、フレイヤは宝物を自慢する幼子のように語りかける。

「強くはないの。貴方や貴方のファミリアの家族子は勿論、私の子と比べても、今はまだとても頼りなくて、弱々しい。少しの事で傷ついて、簡単に泣いてしまう……そんな子でも綺麗だった。透き通っていた。あの子は私が今まで見たことのない色をしていて……見惚れてしまった。目を奪われたの」

子を慈しむような声音が、次第に熱を孕む。透き通るように白い頬が紅潮し、瞳が潤む。神に対して不適当かもしれないが魔性、とも言うべき魅力が周囲に蔓延する。魂を

引きずり込まれるような気配が満ちる。

「ごめんなさい。こんな話を聞かされても、困ってしまいわよね。でも、誰かに聞いて欲しくて。私の眷族達に言うとは嫉妬してしまうでしょう?」

「そこも可愛いんだけど」と今度は自分の眷族の自慢が始まるのかと、思わず体が反応し身構えた所で。

「でも、その子それと貴方への関心は別のことよ」

——囲まれた。

髪に触れていた手がこちらに伸ばされると同時、一瞬で包囲が完成していた。喉元に突き付けられる槍を、鬱陶しそうにベートは見やる。前後左右、家屋の上、路地の隙間など余さず全て防がれた。

逃げ道はなく、更にフレイヤの後ろからは最強が、向かってきていた。

「アレン」

「……………」

名を呼ばれた猫キャットヒール人の青年は、フレイヤの声にしぶしぶ、本当に嫌そうに突き付けていた槍を下げる。

だが、向けられる殺意は全く衰えていない。ベートが下げられた槍から目を外すし、再びフレイヤに目を向ける

視線を外したベートに、向けられている殺意が増す。

それに気づいているだろうに、フレイヤは一切口に出さず、ただ己の意思を告げる。「悪い条件ではないと思うわ。貴方が領いてさえくれれば、私は貴方に全面的に協力する」

だから、さあ——。

優しく問いかける声。伸ばされる手を掴めば、真実フレイヤは協力するだろう。

それは酷く魅力的な提案で。

言い訳などいくらでも用意出来る。力づくで従わされたという配慮はあちらが用意してくれている。現状オラリオ唯一のLv. 7にして個としての都市最強【おうじや猛者】オツタル。都市最速を冠する【女神の戦車】アレン・フローメル。

その他にも名をさせた一級冒険者達が、わざわざ総出で囲んでいる。同じ一級冒険者とはいえ、Lv. 5のベートではLv. 6のアレンを始めとした者達、まして位階が二つ違うオツタルに勝てる道理はない。方に一つも残さぬ状況こそが、最大の理由となる。改コンバージョン宗は主神の同意がなければ出来ないが、それすらもこの美の神ならばどうにかするだろう。

無論、こんなことをすればフレイヤの名は傷つく。だがそれでもフレイヤはこうして此処に居る。ベートにはそれだけの価値があると、知らしめるように。

アレンたちが主神の寵を受けうる以外にベートに怒るのは、殺意が籠っているのはそのためだ。

この場で唯一、一言も話さずこちらを見やるオツタル。悠然とたたずむフレイヤ。殺意を向けるアレンたち。

ベートはゆっくりと口を開いて――。

「振られてしまったわね」

「残念だわ」と呟き、ベートの歩き去った方を見ながら頬に片手を添えるフレイヤは、チラと自身の眷族を見やる。何でもないようにしているが、フレイヤには彼が何をしようとしているのかよく分かった。

「ダメよ、アレン」

「ですが」

「アレン」

「……申し訳ありません。出過ぎた真似を」

「いいのよ。私の為に動こうとしてくれたのでしよう？」

このまま放っておけばベートを襲撃していたであろうアレンを、フレイヤは笑みを浮かべて優しく窘めた。「行きましよう」と告げ、歩み始める。

オツタルとアレン、二人のみがフレイヤの傍を供し、他の眷族は周りに散っていった。

「よろしかったのですか」

「もう、今度はオツタルまで。いいのよ——今は、ね」

どこか楽しい気な雰囲気フレイヤ。眷族たちに一時的にしてもらっていた人払いが無くなったストリートは元の人通りが戻ってきていたが、フレイヤが歩く先は誰もかれもが黙り、魂が抜けたようにフレイヤを見つめる。それにイラついた様子をアレンは見

せるが、フレイヤの手前、何も行動に移すことなく付き従っていた。

「聖母様が……」

フレイヤはどこから洩れ聞こえた声に少しだけ視線を向けて、すぐに目を切った。

「聖母。あの子は今……」

呟くようにして口中で転がした言葉。ベートへの条件として出していた相手。心根が強く、儚さを感じさせながらも決して折れることのない芯を持った子。美の神である自分からしても認める程の容姿。そして、誰よりも優しかった子。

何よりもその魂の色は、暖かで太陽のように輝いていた。今気に入っている子以前で最も欲して——けれど、どうしても首を縦に振ってくれなかった相手。

今の彼女の足跡を追おうとしても、ほとんど情報が得られなかった。自分の眷族たちを使っても、他の人脈や神脈じんみやくを使っても、だ。

名前も姿も分からない相手というではないのに、その姿を捉えることが出来ない。数少ない手掛かりをかき集めてやっと手にした情報も、核心には至っていない。現れては消える蜃気楼のように、名前は広まっても実像は掴めない。だからこそ、その情報はベートへの対価なり得たのだが、結果はこの通り。

振られてしまった。

「奴を欲するのは、聖母マリヤが関係しているのですか？」

「私がただのついでで彼を欲しているでも？　それは私にも彼に対しても侮辱よ——
と言いきれれば良かったのでしようけど、それもあるわ」

「そうね」と、一つ前置きをしてからフレイヤは口を開いた。

「レベルが高い冒険者達は皆、良し悪しはともかく私が見る魂の色に輝きを持っているわ。あなたたちは勿論、ロキの所の勇者や劍姫、闇派閥の冒険者であつてもね。その輝きが強い子程、高みに昇つて来る。勿論絶対という訳ではないし、ダンジョンで死んでしまふ事も少なくないわ。それでも輝きが曇つてしまつたり、淀んでしまつたりしている子供達よりも確実に強くなる。闇派閥の冒険者の暗い輝きは好みではないけれどね」
多種多様な魂の色。同じものは一つとしてないが、似通つている物はある。輝き方や色、強さなど千差万別だ。その輝きが好きで、ずっと見て来たフレイヤだからこそ言える経験則があつた。

だがからこそ、その例外が目についた。

「でも、彼の輝きは曇っている。いえ、曇つているというよりも、水底に沈んでしまつた寶石のようにぼやけてしまつているの。水底の寶石を取ろうと手を伸ばせば水面が波打つて、輝きがぼやけてしまう。水底に届いても、周りの砂を巻き上げてしまえば寶石自体が隠れてしまう。このまま埋もれてしまふと思つた。けれど、彼はLv. 5強になつ

た。超えるべき壁を越え、高みに向かつて進んでいる。なら、その宝石を水底から掬い上げるのが出来ればどうなるか……」

両手を伸ばし器を作るようにして上へと掲げる。好奇に輝く瞳。何も乗っていないその手は何を掴むのか。

「今よりも、強くなるよ」

「分からないわ。宝石だと思っていた物がただの石かもしれない。鍍金メッキであるかも。今日会って、確かめてみたけれどやっぱり分からなかったわ

——でも、ああだからこそ。

——欲しくなる。

——見てみたい。

——なぜなら。

「未知を求めて下界に降り立ったのが、神々私達なのだから」

彼の輝ペトきが曇ってしまう前の事は少しだけ知っている。有名になり始めて、もう少しすれば手を出すのも悪くないと思っていた。そのころから輝きは水の中にあるような感じだったけれど、せいぜいが手を伸ばせば届くようなものだった。

しかし、今は深い海の底にあるように見通すことが難しい。

それも全てはあの日から。

【涙の日】^{ラクリモサ}と人々に呼ばれ、聖母^{マリヤ}が表舞台から姿を消し、彼の二つ名が【凶狼】^{ヴァナルガンド}へと変わった日。

血と、雷と、炎。崩れ落ちる城。消えた聖母。溶けて消えた誰かの慟哭。

全てを知っているのは、ただ二人だけ。

【凶狼】^{ヴァナルガンド}と【聖母】^{マリヤ}。

きつと聖母^{マリヤ}に届く為には彼が必要だ。根拠はなくとも感じる確信。だからこそ、先の言葉^{それもある}だ。

二兎を追うのは無謀かもしれない

だとしても、欲しいものは手に入れる。

欲張りなのだ私は。

「さあ、気分転換も出来たから、そろそろ帰りましょうか。アレン、馬車をまわしてちょうだい」

「はい、フレイヤ様」

スツと音もなく消えた猫人の青年。それを確認してからフレイヤはオツタルを呼び寄せた。

「ねえ、アレンは随分と苛立っていたけれど、どうしたの？」

「…恐らくですが、凶狼は奴の槍を目で追って、囲まれる前に身構えていました。それが奴の矜持に触れたのだと」

「ああ、それで」

全力ではなかつただろうが、それでもアレンの速度に反応した。自分よりレベル^格が下の相手に主神の前で無様を晒した。実際に戦えばどうなるかは考慮にせず、アレンはそう考えるだろう。最速の猫人である彼は、自身に追いつがる可能性のある存在を許さない。きっとアレンは更に奮起するだろう。

全ては己が矜持の為に。

これは良い誤算だった。

「ふふふ。本当に楽しいわね。オツタルも負けていられないんじゃないかしら」

「もとより私は、誰にも負けるつもりはありません。この身はフレイヤ様の剣であるが故に、振るわれれば絶対の勝利を捧げます」

「ええ、知っているわ。私の愛しい子」

ゆつくりと近付いてきた馬車に乗り込み、腰かけた。滑らかに動き出した馬車の窓を開けて外を見る。流れる景色に変化はなく、それでも変わっていく日々を期待を寄せ

自身の本拠である【戦いの野】ホーム
フォールクヴァングに到着するまで、フレイヤずっと楽し気に口元を緩ま
せていた。



ベートは目的地に着く前に既に帰りたくなっていた。
リストの物を集め終えたと思ったら他派閥の主神に遭遇し、そこまで親しくもない筈
の相手に、いきなり全く知らぬ相手の惚気を聞かされた。

その上、武器を突き付けられ囲まれるという状況に陥った彼の心境は——推して知るべしだろう。

だが流石に今回の慰労を兼ねた宴会は出席しない訳にはいかない。こういうものは立場が上の者が率先して出なければ下の者が出席しにくくなる。

それに普段話せない者との交流を持つ場でもあるから、なるべく参加するようにと団長から皆に言伝えられているのだ。

やつと見えた目的地。テラスに居る団員の一部が、こちらに挨拶してくるのを適当に流し、リストの中から該当する物があれば投げ渡しながらドアを潜ろうとして、二歩下がる。

「ッ!!」

勢いよくドアにぶつかるように飛び出してきた白い影。こちらに気付くことなく走り去る姿にどこか既視感を抱く。少しだけ記憶を掘り下げて、アイズに助けられた冒険者があんな姿なりをしていたなど思い出す。急用か、まさかこの店で食い逃げは無理だろうと思ひ気にせずドアを潜った。

後悔した。

(空気悪ッ)

入って早々に雰囲気のおかしさに気付く。静まり返っている訳ではないが苦々しい

顔をしている団員が多い。またぞろロキが碌でもないことでもしたのかと勘繰るが、どうやら違うようだった。

「俺たちみたいな雑魚が、強くなつてなれるはずがねえんだよ。なあアンタらもそう思うだろう!」

「そんなことはない、と軽々しく断言は出来ない。だからこそ、決めつけることはない。僕は思うよ」

「慰めなんかいらねえ!」

赤ら顔でフィンに絡む見知らぬ冒険者風の男。今にも飛びかかりそうなテイオネをガレスが上手く拘束している。

……状況がさっぱり分からない。が、まあ古今東西、酔っ払いの対処方法など相場が決まっている。

手ごろな空いているデカイジョッキに、抱えていた酒樽からなみなみと酒を注ぐ。

近くにいた団員がジョッキから漂う酒気を嗅ぎ取り顔を引きつらせる。

「ん」

「ああ? 悪いなちようど酒が無くなってたんだ!!」

こちらの姿が見えない位置に立ち、ベートは後ろから突き出すようにジョッキを差し出す。男はそれを誰に渡されたのか確認せず、高まった気分のままジョッキの酒を飲み

干し。

「飲み干して、男はそのまま掃除の行き届いた床にその身を沈めた。男ほど酔っていなかったのか、郡市最強派閥に絡んだ飲み過ぎ以外の原因で顔を青くした仲間と思われる男たちが寄つて来る。

「彼のために聞いておくけど、何を飲ませたんだい？」

「火酒」

「それはまた……」

床に沈んだ男ほどではないが、こちら顔の赤いフィンが苦笑していた。素面の時に飲んでもキツイ酒を飲めば、既に酔いの回っていた男が倒れるのも無理はない。

死にはしないだろうが、よほど酒に強くない限り、明日は二日酔いで地獄の苦しみを味わうことになるだろう。

「あ、あの。…すみませんでした。こいつも悪気があつたわけじゃなくて。普段はしっかりしてるんですけど」

「ああ、大丈夫だよ。非はこちらにもあつたんだ。彼にもすまなかつたと伝えてくれるかい？」

「はい。勿論です。ご迷惑をおかけしました」

一人がフィンに謝罪をして、二人が倒れた男に肩を貸して担ぐように持ち上げる。

残った一人が代金を支払っていた。

もう一度頭を下げて、店から去ろうとした男たちに「それと」とフィンが声を掛ける。「強くなれないと言っているけど、それでもどこか諦めていない彼は、きつと先に進むことが出来ると思う。先は険しく、挫折そうになるかもしれない。けど、こうやって倒れた後も心配してくれる、悪いところばかりじゃないんだと言ってくれる仲間がいるんだ。少なくとも団長として、皆を率いる素質はある。だから、月並みなことしか言えないけれど、同じ冒険者として君たちの躍進を願っているよ」

最後に「酒に弱いのは直した方がいいけれどね」と笑ってフィンはジョッキを傾けた。絞り出したような声で「——はい」と返事をして、今度こそ男たちは去っていった。

「ガレス」

「おお待ちとおったぞー！」

何かいい感じで話が終わったようなので、ベートはいい加減邪魔な酒樽をガレスに渡した。喜々としてジョッキに火酒を注ぎ、一息に飲み干す。

「くくくッうまい!! やはり火酒は効くわい!!」

「うーん、あ、ベートやつと来たか。遅いで」

「もう飲んだくれてるのかよ…」

「ガレスと飲み比べしててなあ。勝つたらリヴェリアのおっぱい自由に出来るんやー、

ベートも参加する？」

「するか」

半日かけて集めた品々をそれぞれ頼んでいた者達に投げ渡す。そこかしこで歓声が上ががる様は餌やりでもしている気分になる。

「ご苦労だったな」

「どうも」

全て渡し終えて、適当に隅の席にでも行こうとしたが、リヴェリアが横の席を引いたのでしぶしぶそこに座る。

「あれは放っておいていいのか」

「どうせ全員潰れるだろう」

「ガレスに勝てる奴は居ないか」

ウエイトレス
給仕に酒を頼み、わざわざ残しておいたのかバランス良く取り分けられた料理に手

を付ける。流石に少し冷めているが、それでもしっかりと下味の付けられた品は十分に美味い。

保管状態が良いのか、シャキシヤキとした歯ごたえのサラダを食む。市販品ではない味のドレッシングは、エルフを除けば大抵の者達に箸休めとして食べられるサラダに食べごたえを出している。

たつぷりのキャベツとベーコンをクリームで煮たスープは、酒に合うように塩気がやや強いが、ほのかにキャベツの甘みを感じられる。

卵黄と油、特製だというソースをふんだんに使われた鳥のあぶり肉。こちらはついさつき出された物なのか、切り分けるとナイフを差し込んだ隙間から透き通った肉汁があふれ出る。

表面に刷り込まれた香辛料が口の中でぴりりと弾け、噛み締めればじつくりと焼かれた皮目はパリパリと香ばしく、身はふつくと柔らかい。

「お待たせしましたニヤ」

「ああ」

猫人の給ウエイトルス仕から酒を受け取り、口をつけた。油っぽくなった口中を酒が流してくる。

(歯ごたえが足らねえ)

一通り食べて、もう少し分厚いか噛み応えのある肉が欲しいとベートは思う。十分に料理は美味いが、これは単純に好みの問題だった。

「随分と遅かったが、何かあったのか」

「品を集めるのに時間がかかった」

「……テイオネの持っていた物か」

「あれが一番時間が掛かったが、他のもそこそこにな」
因みにテイオネが宴が始まって早々にフィン盛に使おうとしたため、「愛の秘薬」は没収されていた。

水でも飲むように火酒を空けるガレスを努めて見ないようにしながら話を続ける。あれと飲み比べなど何の嫌がらせだ。また一人、無謀な飲み比べに参加していた団員が轟沈した。先ほどの男のように介抱されることもなく、放置されている。近くの女性団員が侮蔑の目で見ているため、後日肩身の狭い思いをするだろう。

「そういうええさっきの件だが」

「……もう」

リヴェリアがふと何事か言おうとした時、ゆらりと幽鬼のようにテイオネが立ち上がる。

周囲が訝し気に見やるが、それは一部のみで多数の団員はやたらと盛り上がる飲み比べに意識が行っていて気付かない。

「テイオネ? どうしー」

「もう、我慢出来ないわ!! 絡んできた見ず知らずの冒険者にすら優しい団長の包容力ツ。わ、私の身も心も包んでくださいだんちよおおおおお!!」

「え、ええちよおおお落ち着いてテイオネ!」

「わああああティオネさんご乱心!!」

叫びだし、フィンの上に突っ込もうとするティオネを必死で止めるティオナと周りの者達。暴れ回るティオネに触発されてか、他の団員達も騒ぎ出す。

酒と追加で頼んだ骨付き肉、その他の料理を抱えて隅の席に場所を移す。

「費用はロキ付けだな」

「主催だしな」

後ろで行われる喧騒を聞きながら、しれつと付いてきていたりヴェリアが諦めたように呟いた言葉に軽く返す。

階層主よりも余程迫力のある顔になった『豊穣の女主人』の店主が怒声を上げて。下手人たちを物理的に黙らせるまであと少し。

長かった一日の終わりは、酒と乱痴気騒ぎで締められることになった。